再び迎えるスイートピー

それは、彼等が知る事となる前の事……
昔々ある所に居た、独りの男が所持していたとある武器が存在していた。彼だけが持つその武器は、魅力が溢れる中、ある人を助け、またある人を助けるために刈り続けてきた。そしてその命が絶たれ、武器は独りとなりその世界での行動を終え、幕を下ろした。
……そう、誰もがそう信じていた。悲劇を生んだ、男の所持していたあの武器が。また惨劇を生む事となる事を、誰もが恐れていたのだった。
ダークファルスの脅威に、怯えない日を夢見て……

ピンポーンッ

「ん、はーい。」
そんな事象とオカルトな話とは無縁の、クラッド６内にあるマイルームの一室。インターホンの音と共に返事をしたフィルスターは、手にしていた雑誌の山を降ろし主人の元へと向かって行った。
「主。何か届け物が来たみたいだぞ。」
「ん、届け物？」
リビングに置かれたテーブルで武器の手入れを行っていたギラムの元へと向かい、やってきた相手の要件をフィルスターは伝えた。その言葉を聞いたギラムは武器を一度置き、届け物を受け取りに入口へと向かおうとした。
「ぁっ、主。俺が代わりに取りに行きますので、どうぞ座っててください。」
そんな彼の様子を見て、もう一人の同居人であるリニログーンが言葉をかけた。彼もまたフィルスター同様に部屋の掃除をしており、彼は雑巾とバケツを持ち笑顔でそう言っていた。
「あぁ、じゃあ頼めるか。リニロ。」
「おやすい御用です。」
自分の代わりに取りに行ってくれると言い出した彼の言葉を聞いて、ギラムは素直にその好意に甘える事にした。返事を聞いたリニログーンは持っていたバケツと雑巾を置くと、軽快な足取りで入口へと向かおうとした。その時だ。
「待てっ！　主の荷物は俺が取りに行く、お前は掃除してろ。」
「？」
彼の行動を見たフィルスターはリニログーンの手を取り、代わりに先ほどまで彼が持っていたバケツを手に持たせた。どうやら荷物を取りに行くのを代行する様子で、主人のためになる仕事を譲るよう言って来たのだ。主人思いではあるのだが、何処か脅迫的な物言いは単なる嫉妬としか言いようがない。

とはいえ、可愛い嫉妬は日常茶飯事なのかギラムは左程驚いてはおらず軽く肩をすくめているのだった。
「いいえ、俺が取りに行きます。フィルは中途半端にしていた本の整理をして下さい。」
「んなもん後でも出来るだろ。俺がやるっつってんだから、良いんだよ。」
「駄目です。」
「んならジャンケンだ！　構えろ！！」
「望むところです！」
そしてこれまた恒例なのか、二人はそう言い右手を後ろに構え何かを居合する体制を取った。まるで刀を鞘から引き抜く様な体制を取っているが、彼等の手元には武器を間送するフォトンの動きしか見えない。彼等の言う『ジャンケン』が行われる時に見せる、特融の動きだ。
「後出し厳禁、主に誓う！　俺達マシナリーの一心一反勝負の一手！」
「出したら認めろ、正々堂々！　ジャァアン・ケェエン・ポン！！！！」

パッ！

「……チッ、両方『ウォンド』か。　なら次だぁあ！！」
「望むところぉおお！！」
彼等の言うジャンケン、それは３種の武器ジャンルで勝敗を決める。別名『小さな翼(リトルウィング)じゃんけん』だ。使う物は普段彼等が手にしている【打撃武器、射撃武器、法撃武器】であり、打撃は射撃に、射撃は法撃に、法撃は打撃に弱いと言うサイクルが彼等の中で決められており、弱い一手を出した方が負けと言う物だ。しかし持っていない武器がフィルスターとリニログーンにはあるため、その部分は特別に用意してもらった『セイバー』と『ハンドガン』で代用しているのだ。
ちなみに先ほどの一手は、フィルスターが『グラナホドラ』で、リニログーンが『マジムラ』であった。
両方とも法撃武器のウォンドだったため、仕切り直しだったと言う意味だ。余談だがこのじゃんけんの命名をしたのは彼等であり、小さな翼は社名ではなく彼等の『背中の羽根』の意味である。
『相変わらずウルサイじゃんけんだな……』
とはいえ、主人からしたら喧しいじゃんけんでしかない。今回も勝敗が決まるのに時間が掛かると判断した様子で、二人をその場に残し彼は一人入口まで向かい扉を開けた。するとそこには配達員が立っており、彼はいつもの様に受領印を書き荷物を受け取って扉を閉めた。
彼が受け取ったのは小さな小包であり、両手でしっかりと持てる程の小さな物だった。
「相子でぇ……　……って、主！？　取っちまったのかよ！！」
「お前等が長いからだ。勝敗を待ってたら、持ってきた奴が立ち疲れちまうだろ。」
「そのくらい大丈夫ですよ。仮に疲れてたら、主よりも『軟(やわ)』って事で完結しておきます。」

「完結するな。……ってか、俺基準かよ。」

「無論だ！」「無論です！」

「はいはい。」
とはいえ、彼等の仕事を取った事もあり軽く怒られたギラム。何故自分宛てに来た荷物を取りに行っただけで怒られなければならないのかと理不尽な所に呆れるも、彼等の言い訳にはもっと呆れざるえない。彼等からしたら自分達の主人は『最高の主人』と見ており、彼以下の人種は『良くない』という事で完結できてしまうのだ。
どういう観点からそう言う視点が出来上がったのだろうかとギラムは呆れるも、それだけ好きなのだから仕方がないとこちらも諦めるしかないのだ。ある意味、出来上がったサイクルなのかもしれない日常なのであった。

「そういや主。どっからの荷物だ？」
そんな日常が平穏なモノとして確立しつつある中、ギラムは届いた荷物を開けていた。送られてきた荷物はテープと伝票が付いただけのシンプルな物だが、送り状が付いているものの宛先が書かれていない謎の代物。一瞬印字ミスかと思われたが、よくよく見るとその痕跡もない白紙に等しい物だった。
一か所を除いて。
「宛先が書かれていませんね。でも、このマークは……」
「あぁ、ＧＲＭ(ガルム)社のだな。どっからやってきた代物なんだか。」
荷物の一部には会社の社印マークが印字されており、荷物の大元が武器を生産している会社である事が判明した。彼等の居るリトルウィングでも使用している武器は、主に四つの会社名に種類が分類される。

惑星パルムに拠点を置き、マシナリーの生産も行っている『ＧＲＭ社』
惑星モトゥブに拠点を置き、激しい環境でも威力を提供する『テノラ・ワークス社』
惑星ニューデイズに拠点を置き、法撃武器の生産を得意とする『ヨウメイ社』
そして、上記の会社とは違う場所で造られた、もしくは出土場所が不明となっている武器が『クラバ製品』の扱いになっている。

ギラムが使用している武器は共通点はあまりないものの、フィルスターとリニログーンは元々はＧＲＭ社で造られた個体だ。使用している武器もその社のモノであり、一部例外の品も携帯し主人のアシストを行っている。
今回送られてきたのはその中の内の一つの会社で、送ってきた相手が不明の代物であった。
「んー　最近ＧＵＭの依頼とか受けてねぇし、送られてくる理由がわっかんねーな。」
そんな謎の荷物を目の当たりにし、フィルスターはビジフォンに向かい過去数か月間の依頼をチェックし出した。受けた依頼をこまめにデータとして取っておく主人のためにと、フィルスターが管理しているリストには様々な依頼が乗っていた。依頼先と日付はもちろん、どれくらいの所要時間があり依頼報酬の額は幾らだったか。また、同行者として付いて行ったメンバーの名前と社員番号まで記載されており、ある意味大きな情報リストと言っても過言ではない代物だ。
しかしそのリストには、過去数か月間ＧＲＭ社からの依頼は受けていない事が記されていた。
「……　もしかして、アイツからか……？」
「アイツ？」
そんな謎の荷物をしばし見ていたギラムは、心当たりが見つかったのか荷物の封を切りだした。その行動を見たフィルスターとリニログーンは不思議そうにその行動を見ており、開けられた箱の中に入っていたモノを見た。そこには一本の電報と思われる媒体と、青色のボディが印象的な

マシナリーの頭部が見えた。綺麗に箱の中に納まっているため何が入っているのかは解らないものの、機械の頭である事だけは解った。
中身を一瞥し終えると、ギラムは媒体を取り出し中に入っていたメッセージをチェックした。すると目の前に画面が展開され、書き込まれていた文を彼は眼で読んだ。
「……やっぱりな。シノワビートからだ。」
「ぇっ、アイツから？」
「俺が受けた依頼の一つに、アイツからの依頼があっただろ？　いろいろあってやったのはアリン達だが、別途の礼をこっちに送って来たらしい。調整してもらったマシナリー達は、正常に稼働してるってさ。」
「そうでしたか。良かったですね。」
「あぁ。……で、こっちはアイツからの選別の品であり、」

ガサガサガサ……

「不用品として捨てられていた、新製品のシャドゥーグ『ディーラカーナ』だとさ。」
送り主の確認とお礼が書かれた手紙を読み終えると、彼は箱の中から荷物を取り出した。入っていたのはフィルスター達と似た顔付をしたシャドゥーグであり、最近注目を集めているＧＲＭ社の新製品だ。ドラゴンタイプのマシナリーが人気を呼んだ波に乗って開発された物の様子で、カラーリングは『ウィンドベル』と同じ色合いだった。
しかし何処か壊れている様子で、電源を入れても飛び立たず彼の膝の上に乗ったままだった。
「そういや不用品とか言ってたな。どっか壊れてるのか？」
「そうみたいだな。直せるようなら、直して使ってくれって事なんだろ。フィル、キットをくれ。」
「あいよー」
『キット……？』
訳有の代物である事に間違いがない事を知ると、ギラムはフィルスターに道具を取ってくるよう頼んだ。頼まれた品を取りにフィルスターが向かった先は、ベッドルームに備え付けられている倉庫であり、中から取り出したのは赤いアタッシュケースの様なものだった。中にはマシナリーのネジやパーツを取り外すための道具一式が揃っており、主人の元へと持って行きながら彼は蓋を開けた。
手元に道具が届くと、彼は早速背中のパーツを留めていたネジを取り外し、中に張り巡らされた配線を見だした。そんな主人の様子を見て、手元が暗くならない様にとフィルスターはベッドサイドのランプを点け、部屋の隅に置かれていたスタンドライトを彼の前に置いた。
「主、中見えるか？」
「あぁ、十分だ。ちょっと時間かかるから、二人とも好きにしてて良いぜ。」
「了解ー」
手元が明るくなり中が見えやすくなると、ギラムは再び顔を動かし中の配線に異常がないかを確

かめていた。一部噛み合っていない部分が見つかると彼はピンセットで取り外し、正しい方向を見合わせながら点検を行っていた。
そんな主人と相棒を見て、リニログーンは不思議そうな顔をしながら声をかけた。
「ぁ、主。何してるんですか……？」
「何って、細部の点検。直さないと動かないんだったら、自力で出来る所はやってみないとな。」
「あれ、主ってそんな事も出来るんですか？？　フィルの点検は、何時も設備の整ったところでやってるって聞いてましたけど……」
「なーんだ、空気読めるくせして主の意外な才能を見破れないのか？」
主人の行動に違和感を覚えたリニログーンは、質問に対する返答にさらに疑問を抱いていた。彼の所で行動するフィルスターは定期的にメンテナンスをする事が主人に義務付けられており、基本的にお金を払って行う事となっている。中には自力でやる相手も居るものの、その場合は損害に対する返金が無いためリスクが付くため好んで行う人はあまりいない。ギラムもその内の一人であり、基本的に自分の手でフィルスターの身体を調整する事は無く、ちゃんとした機関にメンテナンスをお願いしている。
一時期エミリアに行われそうになった事もあったが、今はそんなこともなくいつも通り整備が行われていた。ゆえに、そんな技術がある事を知っている者は、社内でもごく一部に等しい。
「主の学歴は中途半端だが、顔に似合わず結構細かい作業とか得意なんだよ。時間がかかるけど、大体の事はなーんでもやっちまうんだ。んで、一番得意なのは『ナヴァル文字の解読』なんだと。」
「ナヴァル文字？？」
「まぁ、それを言い出したのはフィルだけどな。小さい頃世話になってたナヴァルが居て、そいつがよく牙を使って地面に文字みたいなものを書いてたんだ。だから、モトゥブとかでその文字を見かけるとちょっと嬉しくなるんだけどな。」
「そうなんですか……」
そんな彼の技術を知っている一部に該当するフィルスターは、自身の主人の特技に鼻を高くしながら自慢していた。基本的に主人が自身の特技を話す事が無い事もあるが、彼からしたら自慢の主の為かもっともっと名声を高くしたい気持ちがあるのだろう。仕事も立派に行え、上司との関係もあり、種族柄に収まらない彼の行動力に、フィルスターが魅入られていると言っても過言ではない。そのためか、同士でありライバル関係に居るリニログーンに対してもこんなに偉そうな態度を取っている。
ちなみにフィルスターの行動に対しては、ギラムは何も言わない。すでに容認しているとも言えるが、半ば放置しているとも言える。
「でも、そしたら。何故フィルと俺の点検は、何時もお金を出してメンテナンスに出してるんですか？　出来るのなら、俺は主に見てもらいたいです。」
「まぁ、その気持ちは買うんだけどな。さすがにＳＥＥＤの免疫チェックは出来ないし、見様見真似で俺がやるよりも確実だし早いからな。お前等にはいつも健康体で居て欲しいから、ちゃん

と金を出すんだよ。」
「そうでしたか。すみません、ワガママを言って。」
「気にすんな、リニロ。」
とはいえ、リニログーンからしてもフィルスターがギラムを自慢したがる気持ちを解らない事も無かった。廃棄され続けてきた自分をあっという間に社員に変えてしまい、部屋は違えど彼のマイルームにいつでも入室する許可を貰えた事。フィルスターの留守中を任され二人きりで居る事も稀ではない事が、また嬉しかったのだ。
強面なビーストの青年に心から大切にされ、笑顔にさせてくれる主人の趣味。それを知った事がまた嬉しくて、フィルスターとリニログーンは自由にしていても主人の元を離れようとはしなかったのだった。

その後しばらくして、目に付く箇所の修理を終えた主人からの声がかかった。声を聞いたフィルスターとリニログーンは早々に彼の元へと戻り、出来栄えを見ようと射道具を見た。
「どうだ主。成果は。」
「まあ、見てなって。」
長丁場以前に見られた状況下で行う事に支障が出ると言われ、その場を離れていたフィルスター　ギラムの腕前を一番に知っている彼の質問に対し、ギラムはそう言いながら膝元に置かれた射道具の電源を入れた。すると、機械の起動音と共に背中の翼が羽ばたきだし、徐々に射道具は空へと飛びあがった。
「凄い……！　初めは電源を入れても、反応が無かったのに。」
「配線が一部繋ぎ間違いがあったのと、ちゃんと端子が噛み合っていなかった部分があってな。それを直したら、こんな感じだ。」
初めと今とでは状態が違う事に驚き、リニログーンは関心の眼差しを送った。こちらは特技そのものを知らなかった事もあるが、不良品である小さな機械を簡単に直してしまった事にも驚いていた。
現場での作業が得意な事は知っていたが、内職的な事務作業とも言えそうな修理もこなせる所を見ると、もはや彼の苦手分野は無いのではないだろうか。改めて自慢の主人への評価ポイントが増えた様子で、ますます好きになってしまう行動振りである。しかし、
《ギギギギッ……》

ガコガコンッ

「ぁ、あれ……？」
どうやら万全の調子ではない様子で、飛んでいた射道具は妙な音と共に体制を崩し、階段を落ちるかのように段落的に落下を開始し出したのだ。それを見た二体は慌てて手で受け止めようと手を伸ばすも、先に延びた茶色く日焼けした手によって優しくキャッチされた。落下を防ぎ壊れる事も無かったのだが、どうやらまだ不調の箇所がある様だ。
「んー、こいつは厄介だな……　簡単な修理じゃ、まだ無理か。」
「新製品のかつ、不良品だしな。なんか設計図みたいな奴探してみようか？　主。」
「そうだな。なんかそれっぽいので参考になりそうな奴、見繕ってもらえるか。」
「了解ー」
パッと見で外部に異常が無いのを確認しながら、ギラムは手にした射道具をベットへ置きしばし相手を見つめていた。飛行する事を止めその場に置かれている射道具の瞳はギラムを見ているも、発声機能は無いため何も言わずにその場にただ居るだけであった。
そんな主人の成果を見たフィルスターは、ある提案をし修理に必要そうな情報を仕入れようかと言い出した。相手からのハッキングを防ぐ事が得意な彼は調べものも得意であり、軽く非合法で

はあるが何処からともなく内部情報も仕入れる程の腕の持ち主。かといって乱用すれば彼がスクラップされるのは目に見えているため、基本的に主人からの許可が無い限り行動を起こす事は無い。もし仮にばれたとしても主人が罰則を受ける名目の為、彼は何も気にしないのだ。
「バレんなよ、面倒だから。」
「わーってるって、安心しな。俺、失敗しねえから。」
「はいはい。」
とはいえ前歴が無いためか、自信満々のフィルスターは主人を安心させようとそう言った。内心楽しめる特技披露の場が出来た事に嬉しく思っているのか、上機嫌で鼻歌を歌いながらビジフォンの元へと向かって行く。何も身に纏っていないのもおかま内無しで、腕捲りをするかのような行動もとっている。
遠目で見ると、とてもハッキングが得意な相手とは思えない可愛さである。
「んじゃ、その間簡単な依頼でも受けて来るぜ。フィル、リニロ、留守よろしくな。」
「解りました主。行ってらっしゃいませ。」
「行ってきます。」
そんな相棒の成果を待つ事にしたギラムは、その間外仕事をして暇を潰してくると言ってきた。彼の提案に同行しようとしたリニログーンではあったものの、その提案前に彼が言い出した事を聞き、いつも通りの返答をし無事に帰ってくる事だけを祈る事にしていた。
何も言わなくても彼の耳には主人の声が聞こえており、部屋とは違った空気を吸いに行きたいという気分で言い出した事を解っていた。居場所も初めから検討は付いているうえ連絡も出来るためか、リニログーンは笑顔を見せつつ主に頭を撫でられた後、背中を見送るのであった。
「……　フィル。」
「ん？」
その後主人が出て行ったのを見ると、リニログーンは寝室へと戻り作業を行っていたフィルスターの元へ移動した。声をかけられた彼は返事をしつつ指を動かしていると、意外な言葉がやってきた。
「自分も何か手伝います。情報の仕入れをするのでしたら、その整理も必要でしょうから、それをさせて下さい。」
「おう、助かる。んじゃ頼むわー」
「了解しました。」
なんと彼から助力宣言があり、彼の仕入れた情報の整理を行うと言い出したのだ。その発言には軽く驚くフィルスターではったものの、やる仕事が半減する事は嬉しかった様子で提案を受理し、一部の操作を出来る様ビジフォンを弄った。
するとリニログーンの目の前に画面が展開され、情報整理が出来る状態に瞬時に切り替わった。
「外部は見れねえけど、それでデータの圧縮とか好きに出来るからさ。主が返ってくる前に、良い情報仕入れようぜ。」
「そうですね。自慢の主ですから。」
「おうっ」

その後喧嘩もせず両者の意見が一致した事からか、二体は仲良くその場で作業を行いだすのであった。

その頃ギラムはと言うと、惑星ニューデイズにある『昇空殿』へと赴いていた。今回の依頼は施設内にあるガードロボットの点検であり、一部侵入した原生生物を駆除する事も依頼に含まれていた。近日中に行われる祭典で使われる場所の様子で、その際の安全性を高めるための実施だそうだ。
「えーっと、点検個所は五か所か……　フィル達もいねぇわけだし、ルートとかは自分で探さないとな。」
そんな依頼現場へと到着した彼は、早速施設内に立ち入り点検個所のチェックをしていた。ルートをどう組みスピーディにこなすかは全てフィルスターのナビで行っていたため、今回は自分で行わなければならない。フリーの時代には何度となくこなした事があったものの、今回はある程度のブランクがある中の検索。
そのためか、多少面倒そうである。
「……ま、簡単に近い所から攻めて行くかな。確か修繕作業が幾つかあったはずだから、そこだけ避ければ問題ないだろ。」
とはいえ文句は言う事は無く、彼は武器を手にし周囲の気配に気を配りながら走り出した。

忍び寄るロベリア

ピッピッピッ……

「……よし。ここは異常ないな。」
自室で行っていた修理を中断し、相方に情報収集を頼んでいたギラム。一人やって来た惑星ニューデイズでの依頼をこなしており、作業は順調に進んでいた。道中を移動している際にやって来た原生生物を駆除しながらの依頼ではあったものの、左程疲れを見せておらずいつも通りのペースで点検を行っていた。
現在手掛けていた場所は三か所目の点検ポイントであり、残り二つである。
「さて、次は……こっちだな。」
システムが正常に稼働している事を確認した後、彼はその場を離れ次の点検個所へと向かって歩き出した。道中を急ぐたびではないため走る事は無かったものの、いつも通りの速度で依頼を進めていた。比較的作業効率の早い彼は、普段であれば相棒のフィルスターとの行動を共にしているため進路や作業工程を自ら行う事は少ない。どちらかと言うと彼が依頼の際に良く行っているのは『殲滅作業』の方であり、細かい機械点検や設備の作動、進路案内等々は全て相棒に任せている。そのため今回は少しペースは遅いものの、自力で出来る範囲で行える依頼を今日は選んだのだ。
だからといって依頼に抜かりはなく、キッチリ行うところは彼のスタンスである。
『……そういや、まだフィルからの連絡が入ってなかったな。思った以上に見つからないのか、それとも俺が終わる頃を見計らって送ってくるのか……　二択だな。』
とはいえ、道中を邪魔する相手が居ない間は隙を見せる事も彼にはあった。依頼中に隙を見せる事は命取りになる事もあるのだが、彼は左程その点に関しては気に留めている部分は無いのか、自身の端末に経過報告が入っていないかを確認していた。
仕事の慣れとも言えるが、今回の場合は『連絡待ちの間の時間つぶし』のための依頼と言っても過言ではないため、どちらかと言う暇なのかもしれない。最初の点検個所では時間を食ったものの、今では手慣れた様子で機械を操作するくらいの余裕が出来ている。そう言う意味では、彼には何かと余裕が持てる技量があるのかもしれない。
「……ぉっ、ココだな。さーて、次の奴には不具合があ」

カタンッ

「る……　ん？」
そんな余裕を見せながらもマイペースに行動をしていた彼は、次のチェックポイントである物が足にぶつかった。何か軽めの機材的な音と、足への違和感がやって来た事に彼は視線をおろし足元を見た。
するとそこには、赤い棒状の武器が目に映った。

先端にはフォトンで光る刃を装着しており、紅色を基調とした鎌の様なソードであった。
「……何だこれ。」
その場に落ちていた武器を眼にし、彼は膝を折り武器を拾おうとした。しかし伸ばした手は武器に触れる前に一瞬飛びのき、自然と彼は拾うべきかどうか迷う感覚に襲われた。
『何だ……この違和感……　……何か、拾っちゃいけねえ感じがする……』
不意にやってきた感覚に彼は不審に思い、一度手を下げ静かに武器を眺めた。誰かが持ち込んだ形跡はなくただそこに落ちていた武器は、よく見ると『ソウルイーター』と呼ばれるソードであった。武器のジャンル上『大剣』に属するものではあったものの、形状を一言で言い表すと『鎌』と言った方が正しいくらいだ。
何故こんなものがココに落ちていたのだろうかと考えていた、その時。

カタカタカタッ……

「ぇっ」
不意に武器が小刻みに揺れだし、床と触れ合った場所から音がした。何事かと思いギラムは一瞬その場から飛び退き、少し距離を置いて再び武器を見た。すると、

スゥーッ……

「うぉぁあああああっ！！！」
落ちていた武器は不意に身体を起こし、自らその場に立ち上がり宙を漂い出したのだ。これにはさすがに驚いたギラムは柄にもなく仰天し、尻餅を付きながら叫んだ。原生生物がどんなに可愛かろうが怖かろうが恐れる様子を見せない彼が、あまり見せる事のない動揺を見せた珍しい光景である。
「なっ……なっ……なっ……！！」
あまりの現象にどうするべきかと戸惑いつつも、彼は冷静になろうと一度その場で顔を下げ、深呼吸をし再び目の前を見た。しかし先ほどから目の当たりにしている風景に変化は見せておらず、むしろ武器がゆらゆらと浮いている光景が見えるだけであった。
結局のところ、青ざめた表情をする事しか彼には出来ない。
「……っ。だ、駄目だ……意識を飛ばしてる場合じゃねえ……　気ぃ失うわけにはいかねえだろ、俺……！」
とはいえ再び自分自身を叱咤して気合が出たのか、今度は深呼吸をした後に両手を地面に付け、ゆっくりと彼は立ち上がった。誰かが仕掛けをして自分に罠を張ったのかもしれないという仮説が思い浮かんだためか、動揺している場合では無いと気が付いたのだろう。少々無理をしている所もあるものの、一生懸命に前に立ち向かおうと健気な姿を見せていた。
そのため、まだまだ表情がぎこちない。
「……ハ……ハハハ。誰だぁ、こんな妙な真似をしてる奴は……　俺を驚かせて少しは気が

済んだのなら、さっさと姿を見せろ！」
この際誤魔化す事には諦めた様子で、驚いた事を認めながらも彼は周囲に向かって叫んだ。どんなトリックを使ってオカルトな現象を見せたのだろうかという種明かしよりも前に、現状を起こした張本人が現れる事を望んでいたのだろう。それには、訳があった。
「……　……」
周囲の微かな音も見逃しまいと耳を澄ませ、周囲を伺っていた。その時だった。

《お前の望む相手は、ココには居ない。》

「……ん？」
不意に物音では無い声の様な物が聞こえ、彼は違和感を覚え再び辺りを見渡した。今度は正体を暴く様な眼つきの鋭さではなく、何処から聞こえたのだろうかと言う疑問の眼差しだ。
どう考えても肉声から発せられた声では無かった様子で、何か違って思えたのだろう。しばらく辺りを見渡した後、首をかしげながら目の前の武器を見た。
「……気のせい、か……？」
《気のせいでは無いぞ。》
「ぇっ……」
呟き混じりに発した声を拾ったのか、再び謎の声を彼の耳は捕えた。しかしやってきたのは声だけではなく、彼は背筋を凍らせる様な肌寒さを越えた感覚を覚えた。そして声の主が何処に居るのか、彼は気付いてしまったのだ。
「ま、ま、ま、ま、まままま……！　嘘……だろ……！？」
《目の前の武器だ。俺は。》

「うわぁああああーーーー！！！」
そして再び、彼はやってきた声を耳にし悲鳴を上げた。彼がこの世界で一番嫌いな物が目の前にある事を、知ってしまったが故の叫びであった。

カタカタカタ……

「……」
《点検か。中々器用な部分を持ち合わせているな。》
「……」
《俺も手を付ける事はあったが、現場に赴く方が気楽で良かった。自身が生きている気がして、良かったしな。》
「……だぁああー！　何なんだお前は！！　驚かせた挙句、何の用だ！」
《俺は何も言っておらんぞ。》
「っ……」
突然依頼先で見つけたソウルイーターに絡まれた後、ギラムは軽く無視しながらも依頼の遂行をしていた。次の箇所に到着し点検をしている際も武器はそばから離れず近くをうろうろしており、どんなトリックを使っている訳でもなく存在している相手の気配が付きまとう。軽く敵の気配と間違えそうになるくらいの勢いであり、彼は平然を装いながらも画面を見ながら点検をしていた。
が、とうとう我慢出来なくなった様子で怒っていた。
「頼むから付きまとわないでくれ……　俺、そういうオカルトな類は苦手なんだ……」
《ほう。意外と苦手なのか。》
「顔付でそうは見られない事が多いが、苦手な物は苦手だ。特に霊体は。」
《お化けなら出せないぞ。》
「そうじゃなくて……　……ってか、出されても困るんだが。」
とはいえ、相手もまた平然と彼の言葉に返答をする所を見ると普通に存在だった面影をみせつつあった。今までバレる事無く過ごしていた彼の弱点が意外な物に、武器自身も軽く驚くも苦手な物は苦手だと言う彼の意見に同意した。何が切欠で彼の弱点がそうなったのかはまだ解らないものの、ギラムはオカルトな存在が嫌いなのだ。
存在として生きるモノであれば恐れを抱く事はなく、精神的にも肉体的にも存在するがゆえに怖がることは無いと思っている。だがしかし、化学でも証明する事が難しいとされるモノはどうも抵抗がある様子で、何処か怖い所がある様だ。
《……》
「まぁ、その類じゃないって解ったら急にホッとした。フィル達にはナイショな。」
《ん。誰だ、それは。》
「俺の相棒。マシナリーなんだが、俺の事を理解してくれてる一人だ。家族とは住んでる場所が違うし、現場に出る事が多い俺のバックアップとかもしてくれててな。」
《ほう。》
「偶に俺の事弄ってくる時もあるんだが、根は良い奴でな。今日も俺のために資料を用意してく

れるって言ってたから、独りで来たんだ。」
《そうか。》
しかし話をしていると相手がその類では無い事が徐々に解り、彼もその恐怖心を抱き続ける事は無かった。始めは誰かの悪戯かと思ったが否定され、苦手なモノを説明するも出せない事を告げられると、別の何かである事が彼にはわかったのだ。意識体として存在し、何のために居るのかが解らない武器。それが解っただけでも彼は安堵した様子で、急に表情が柔らかくなり身内の話をしていた。
彼の相棒のフィルスターが作業をする際の邪魔にならない様に行動し、なおかつ普段の自分の職務を全うする行動をとろう。真面目でそうは見えない所が何かと違和感を与えるが、それが彼の個性なのだ。
「……うし、コレで良しっと。次で最後か。」
《お前。名は何と言うんだ。》
「俺か？　俺は『ギラム・ギクワ』　リトルウィング所属の傭兵だ。」
《ギラムか。》
「じゃあな。」
その後一通りの話をした後、武器は彼の名前と所在を問いかけた。質問に対し彼はすんなりと名前と所属事務所を知らせた後、軽く手を振りその場を離れて行った。彼の後姿を見送っていると、不意に相手は行動を取った。
《……》

スッ

「ん？　まだ用があるのか？」
《お前。嫌いなモノは幽霊だけか。》
「えっ？」
不意に彼の横を通り過ぎ彼の目の前に移動すると、武器は別の質問を彼にした。突然の事に驚くギラムではあったものの、相手からの質問に対し何を聞きたいのかが解らず首をかしげていた。そんな彼を見た武器はしばし沈黙を見せた後、こう言った。
《この世界には、幽霊以外にもお前の事を脅かす存在は数多く存在する。　……例えて言うなら、ＳＥＥＤ(シード)とかな。》
「ＳＥＥＤ……」
《お前の家族も、そうでない奴等も多数奴等の手で殺められた。奴等は幾ら仕留めようとも、大元を絶ったとしても必ず沸いてくる。惑星そのものが汚染され、奴らの手に落ちた事も少なくない。》
「……」
《お前も消し尽くしてみないか。奴等を世界に野放しにしておけば、お前の家族が全員居なくなるかもしれないぞ。》

「……」
武器からの例え話で登場した存在、それはこの惑星に住む存在であれば誰もが恐れる存在だった。惑星そのものを侵食し壊し尽くしてしまうほどの力を持ち、存在に寄生すれば命さえも容易く消してしまうほどの存在。大いなる存在『ダーク・ファルス』だ。
所属場所が違う他の傭兵達は彼等を消す術を持っているが、個々の力だけでは奴等を消し去る事は出来ない。英雄と呼ばれた存在もたった一人でこなした訳では無いこの事実は、他の傭兵達に希望を見せた瞬間をもたらした。だがしかし恐れそのものを全て消し去る事は出来ず、今もなお何処に存在し寄生をしようとしているかも解らない。そんな身近な場所にあるかもしれない恐怖を消し去る事が出来れば、人類は皆平和に暮らせるかもしれない。
「……まぁ、確かにそうかもしれないな。事実、俺の父親はＳＥＥＤに殺された。」
《ならば、手を組むのが良いだろう。俺は武器だが、お前の力があれば何でも》

「でもな。それは一人だけじゃ出来ないから、俺は一人で片付けようとは思わない。」
《何……？》
しかしそんな平穏を取り戻すための相手を求められるも、彼は首を縦には振らなかった。同意しＳＥＥＤへ対する憎しみもある中、何故すんなりと賛同しなかったのかを武器は問いかけた。
「ＳＥＥＤがどういう存在なのかは理解してるつもりだし、会社のメンツにもＳＥＥＤを怖がる奴がいる。幾ら免疫チェックしてたって、キャストも汚染されちまえばそれまでだ。」
《ならば、なおさら絶たなければならないだろう。お前が一体でも多く殺せば、それで救われる命もあるんだぞ。》
「確かにな。……それでも、俺はしない。仮に良い相棒を探してるんだったら、別の場所にもっと居ると思うぜ。俺はビーストだが、イレギュラーな方だからな。」
《……》
その後彼からの説明を受け、自分自身をイレギュラーと認める青年の意見を聞かされた。大切な肉親を殺された事もあり、同じ仕事をする人々が恐れを抱く事も知っており、仲間内でその浸食を許された事を知れば彼も行動を取るだろう。
だが自分自身で出来る事には限界も存在し、自分が幾ら倒し続けたとしても元を絶つ事が出来ないと思っているのだ。可能な事はするが、高望みをしてまでも欲しいモノが無い。それが、彼の考えによる否定の理由だったのだ。

ピピピピッ

「ん、フィルか。」
そんな自分自身の意見を話し終えると、彼の装着していた端末から通信が入った事を知らせる音が鳴り響いた。通信相手が誰なのかを確認し彼が端末を操作すると、目の前に画面が展開され相手の顔が浮かび上がった。
「どうしたフィル。」

【主、そろそろ依頼終わったか？　適度に俺達も情報収集してみたんだが、完璧な設計図が拾えなくてさー　でも、主なら使えるだろうってモノが結構見つかったぜー】
「そっか。ご苦労だったなフィル。」
【おうっ　なんたって俺のあるぉっ！】

ドンっ

【なんたって自分の自慢の主ですからね。終わり次第お迎えに行きますので、連絡ください。】
「あぁ。リニロもありがとな。」
【いいえ、とんでもないでぇっ！】

ドンっ

【コイツは俺の補佐しかしてねぇから、そこまで褒める必要ないぜ主。待って】
【待ってますよ、主。】
連絡をくれたのは彼の相棒であるフィルスターであり、依頼が終わったのを見計らって通信を送った事が解った。自身の成果を軽く説明し帰宅を楽しみにしている事を離そうとしたその瞬間、別の相手の顔も浮かび上がる。
どうやら通信は二人一緒に使っている様子で、画面に映ろうと小さな攻防戦が画面越しに展開される。最終的には二人同時に画面に映る場所で、互いの顔を押し出しあいながらの発言であった。
【おい割り込むなよ！！　俺の通信回路だぞ！】
【フィルこそ手柄を独り占めしないで下さい！　自分が後処理をして見やすく加工したからこそ、主が見やすい様になったんじゃないですか！】
【根本的な収集したのは俺なんだから、お前は補佐のおこぼれで充分だろ！】
【ぜーんぜん満足できませんー！】
「お前等、通信回路越しに喧嘩すんなよ。　仲が良いのは解ったからさ。」

【良くない！】【よくないです！！】

「はいはい。」
とはいえ、自分自身の帰りを待っている事だけは解るやりとりだ。軽く苦笑しながらもギラムは彼等に宥める様に声をかけるも、何故か反抗を買った様子でハモりながら彼等は言う。それを聞いたギラムは再び苦笑しながらも二人を見ており、フィルスター達は何処どなく不満そうな顔を見せていた。
《……》
「まあ何はともあれ、もう一か所点検をしたら終わるから。その時、改めて連絡入れるぜ。」

【自分の方に連絡を入れて下さいね。】
【んーやっ、俺の方に決まってんだろ。主の相棒は俺なんだからなっ！】
【今じゃその言い訳は見苦しいです！】
【んだとぉおー！！！】
「こらフィル、リニロ。んなに暴れたら通信が切れ」

スッ

「る……だ……ロ……　……」
【……ん？　おい主、どうしたー？】
その後無駄な攻防戦が再び行われようとしたのを見て、ギラムは彼等を止めようと声をかけようとしたその時。彼の右手に収まるように動いたソウルイーターは彼の掌にしっかりと刀身を握らせ、彼の意識に働きかける様に謎の力を展開させた。すると彼の言葉が徐々に変化を生じだし、彼の言おうとした言葉を段々遮りだしたのだ。
不意な変化を見たフィルスターが声をかけるも、彼からの返答は無い。
「……」
【主？　主？？　返事してください！　主！！】

プシュンッ……

「……クックックッ、いい身体が手に入った……　久しぶりの肉体だ、種族も相まって血が滾る。」
その後通信が遮断され、ギラムの口からは普段発する事のない口調で何かを呟く様に言葉を吐いた。右手に握りしめた紅い鎌の感触を確かめる様に数回素振りをしたところを見ると、彼に変化が生じた事が解る光景だった。
「さて、くらだねえ奴等を速攻片づけて来るか。この身体なら、早々にくたばる事はない。クックックッ……」
素振りを終え感覚を取り戻した様子で、彼は不気味な笑みを浮かべた後その場を走り出した。こなすはずだった依頼を投げ出しての行動ではあったが、今の彼は彼でない事を知る者は誰もおらず、止める者も現れなかった。
『……フィル……　リニロ……』

どんな時でもクロッカス

ピピピッピピピッ……

「……　駄目だ、繋がらね。」
ギラムとの通信が途絶え、しばらく時間が経った頃。彼のマイルームで待機していたフィルスターは、通信機を弄りながら相手先が応答しない事を心配していた。
連絡しているのは彼の主人であるギラムで、あれから時間が経ったものの彼が帰宅をする気配を見せないため、心配になり連絡をしているのだ。しかし一向に通信が繋がる様子を見せず、何度も何度も履歴を入れても返事が無い状態だった。
「連絡をして、もう三時間近く経つのに……　通信も繋がらいし、どうしたんだろう。」
「ったく、リニロが乱入してくるから通信切れちまったんだろー　第一、んなに唸ってたって主は時期に帰ってくるって。報告とかに手間取ってたり、何か別件を頼まれて通信が使えねーんだよ、きっと。」
「でもっ！　それだったら連絡を入れるのが、自分達の主人のギラムじゃないですか。……連絡も入れずに通信に出ないなんて、やっぱり変だよ。」
「お前なぁ……」
そんな自身の主人からの連絡が来ない現状に、彼の身を案じているもう一人の相棒リニログーン。彼は名義上この部屋への立ち入りを許可されている身だが、彼からしたらギラムも主人であり心配しても不思議ではない間柄だ。今までの彼が辿って来た経歴上主人愛が目立つところがあるが、彼もフィルスター同様に帰宅しないギラムの身を心配していたのだ。
リニログーンの様子を見て落ち着かせようとするも、フィルスターは中々上手く行かないためか軽く呆れながら通信を切った。すると、

パタパタパタ……

《……》
「ん。どうした。」
彼等の元に一体の射道具の『ディーラカーナ』が飛来し、彼等の様子を見つめていた。新たにやって来た個体には彼等の様に感情を持ち合わせているわけでは無いものの、やり取りが宜しくない気配を感じたのか、二人の様子を見ている様だ。自然体に近い形で飛べるようになっているのは、留守中に弄ったフィルスターの功績である。
《……》
「そっか、お前も心配なのか。まだちゃーんと主の補助をしたわけじゃねえけど、一応お前の所有者は『主』だもんな。でもまぁ、俺等がジタバタしてたってしょうがねえって。とりあえず飯でも作ろうぜ、そうしてりゃ時期に帰ってくるだろ。」
自身の功績に浸りたい気持ちを抑えながら、フィルスターは射道具の頭を撫でながらそう言った

。機械の彼が撫でる感触は人肌とは違うものの、何かに満足したのか個体は静かにベットの上へと戻り、静かに羽を休めた。そんな彼の様子を見たフィルスターは提案をし、隅で落ち込んでいるリニログーンの気分を掘り起こした。
「……そうですね。分かりましたフィル。」
「ぉっ、やけに素直じゃん。分かりゃ良いんだよ、分かりゃ。」
《……》
彼の何気ない励ましを受け、リニログーンは渋々腰を上げ料理を作ろうとキッチンへ向かって行った。何とか重い腰を上げた事に満足した様子で、フィルスターは笑みを見せながら彼の後を追って行ったのだった。

「……　……ぅーん……」
それから時間が過ぎ、日付が変わり惑星毎の朝を迎えた頃。定位置で眠っていたフィルスターは眼を覚まし、接合部がちゃんと動く事を確認しながら起床した。
「……ふわぁあ～……　おはよう、主……　……あれ。」
軽く欠伸をしながらベットに寝ているであろう主人に挨拶をするも、彼はベットに誰も居ない事を目にした。その後何故そうなっているのかを思考回路を巡らせ、昨日を振り返りながら居ない理由を把握した。
『ぁー、そっか。飯作った後も待ってたけど、結局帰ってこなかったんだっけ、主。』
自身が作業している間の不在を申し出ていた主人は帰宅せず、彼等が眠っている間もシステムが作動した際には起きれる状態に彼は取っていた。だがその配慮も虚しく朝を迎え、今の現状を迎えている事を彼は理解した。
あれから半日近い時間が経ったものの、彼の通信機にはログは無く連絡に対する返事も入っていなかった。念のためにとビジフォンを起動し連絡が無いかと確認するも、こちらにもそのような物は何一つ入っていなかった。
『……まっ、今時の若人なら家に帰らない日があっても不思議じゃねっか。主はビーストだし、性欲くらい並み以上にあるだろ。多分。』
その後自身で何かを解決する様に仮説を立てた後、意味もなく根拠がある様に納得していた。ちなみに種族上の性欲の差などは個体差があり、彼が一晩帰ってこない理由にはなっていない。さらに補足をすると、彼がそのような場所に赴いた事はフィルスターのデータ上にも一度も存在しない。
などと無駄な補足をしている間、フィルスターはベットメイキングをし射道具はその様子を見守っていた。一晩帰らず使用していないとはいえ、彼からしたら日常の業務の為、やらないと気が済まないのだ。
「……うしっ、完璧っ」
「ぅーん……　……あれ、フィル。起きてたんですか……？」

自身の出来栄えに自己満足していると、背後から寝起きの声が聞こえてきた。振り返るとそこには彼の隣に寝ていたリニログーンが眼を擦っており、少し眠そうな雰囲気を見せていた。
「おう、おはようリニロ。飯買ってくるから、テーブルのセッティングよろー」
「ぁっ、はぁーい。……」
そんな彼が起床したのを見ると、フィルスターはいつも通り挨拶をし財布を片手に買い出しに向かって行った。軽く遅れ気味に返事を返しながら起き上がると、リニログーンは使用していたタオルケットを畳み定位置に戻した。その後背を伸ばす様に両手を上げた後、窓辺から外を見つつ呟いた。
『主、何処行っちゃったんだろ……』

「ごちそうさまでしたーっと。」
それからしばらくして、彼等が朝食を取り終えた頃。主人が返ってくる気配を見せないまま食事が済んでしまい、フィルスターは使用したドリンクケースを片づけだした。その様子を見ていたリニログーンはテーブルの上を片づけ、ギラム用にと買ってきた食料を処分した。
「……今日はどうしますか、フィル。昨日の雑務は、なんだかんだで全部終わっちゃいましたし。」
「とりあえずいつもの資料整理と、主が急に帰ってきても良い様に材料のストックだけ用意しとこうぜ。後はまた、その時に考えればよし。良い案があったら、連絡する事。」
「解りました。」
朝のメニューをこなしながら指示を煽ると、フィルスターは洗い物をしながらそう言った。基本的に彼が行っている作業の一部をリニログーンが手伝う形を最近は取っており、仕事量が減っても彼は何も言わずに後輩に指示を出していた。
そんな彼からの指示を受けると、返事をしながらリニログーンは財布を取りに棚へと向かった。
「じゃあ、自分が材料を買ってきます。フィル、留守お願いします。」
「おう、気ーつけてなー　……」
その後買い出しに向かう準備を整えた後、リニログーンは外出する事をフィルスターに伝えた。彼からの報告を受けいつも通りの返事を返していたフィルスターは、不意に何を思ったのか出て行こうとする彼の後姿を見た。するとそこには、いつも通りではあるものの、何処となく寂しげな背中が見えていた。
「リニロー」
「？」
「主がよだれを垂らすような、めーっちゃ旨そうなの買って来いよ！　留守中良い物を毎回用意してたんだーって、思わせてへこませてやろうぜっ！」
「……！　はいっ！」
そんな後姿を見てか、フィルスターはいつもとは違った見送りの挨拶をかけた。普段の彼であれば弄り倒す勢いでリニログーンに茶々を入れ、凹ませて立ち位置を解らせるかの如くの発言をし

たかもしれない。しかし今の彼にそのような言葉をかける気にはならず、彼はそう言いながら買い出しに期待している事を告げるのだった。
そんな言葉を聞いてか、リニログーンは笑顔で返事をし元気に部屋を後にした。
『……ま、こんなもんで大丈夫だろ。アイツ、主が気に入りすぎて一緒に居ないのが寂しいんだろうしな。なんだかんだで、名義上の主人の所に帰らなかったし。』

「？」
声掛けによって雰囲気が変わった事を悟ると、フィルスターは軽く呆れながら彼を見送った。普段であれば夜の間行動する主人の元に戻るリニログーンが、昨日は一切帰る素振りを見せず主人にも『残業をする』と言い出したのだ。
さすがの彼にも嘘を言うほどの事なのかと疑問視するも、リニログーンが抱くギラムへの目を見れば解る事だった。廃棄寸前の自信を助けてくれて、おまけに迷惑をかけたのに部屋への入室を許可してくれた事。どんなにフィルスターと口論しようとも決して怒らず、仕置きもされず電源を切られようともしなかった。ゆえに、とても優しい主人に巡り合えた事を心から感謝している。
そんな良過ぎるくらいの主人が帰ってこないとなれば、心配するのも当然であろう。長年の付き合いであるフィルスターでも異例に思う事態、不安に思わない方が不思議なくらいだ。
《……》
「？　どうした、腹減ったか？」
《……》
そんなリニログーンの行動を思い返していると、フィルスターの元に射道具がやってきた。何かを言いたげな様子を見せる相手を見るも、彼が言った問いかけには首を横に振っていた。
「……ってか、なんだかんだで俺が調整したらすーぐ飛べるようになったな。主が見たら、ベタ褒めくらいしてもらわないと割に合わない仕事ぶり。我ながら頑張ったなー、俺。へへッ」
《……》
「おっと、今のは内緒な？　主にんな事言ったら、めっちゃ撫でられるけど心底恥ずかしいからなっ！　俺と、お前だけの秘密。破ったら駄目だからなー」
《……》
「……ぁー　ってか、お前発声器無かったな。何心配してんだろ、俺。あほらしっ」
半ば独り言に等しいやり取りをしながら自身の発言を悔みつつ、フィルスターも仕事に入っていった。そんな彼の様子を見ていた射道具はしばし彼の後姿を見つめていた後、ビジフォンの近くに降りながら彼の仕事ぶりを眺めるのであった。

主人の不在から時間が流れ、三日目の朝食後。変わらずに仕事を行っていたフィルスターとリニログーンは、今日も各自がやるべき仕事を行うべく職務に付いていた。
リニログーンは変わらず毎食の食事を調達し、その間フィルスターが事務作業を行う。基本的にはこの流れで統一されており、彼等もまたその行動に反発することなく仕事を行っていた。しかし、
「……　ぁー……やる気おきねぇ」
《……》
さすがの長期不在には彼の心身がピークに達したのか、フィルスターは作業を行っていたビジフォンの上で顎を乗せ机に突っ伏した。今までの彼であればどんな事でも文句を言いつつ手を動かしていたのが、ご覧の通りのサボりっぷりである。正確に言えば、存在が時々言い訳にする『やる気が起きない』という奴になっていた。
「……主、何で帰ってこねえんだろ。俺、何か気に障る事……したかな。」
《……》
「……ハッ！　もしや……！！」
彼の仕事ぶりを見ていた射道具の『ディーラカーナ』は、変わらずに彼の隣で大人しく座っていた。彼の独り言を聞いているのか聞いていないのかは解らない無言を貫いているものの、目だけはしっかりと動いている事だけが見て取れる。ある意味、最近のフィルスターの仕事中の喋り相手の様な存在となっていた。
そんな彼に独り言を呟いていると、不意にフィルスターは何を思ったのかビジフォンの画面を弄り、あるデータフォルダを呼び出した。そこには『フィルスター専用』と書かれており、ご丁寧にロックまで掛けてあるほどの内密な保存先。パスワード画面を楽々パスしたその先には、彼の推測上『主人が帰ってこない』理由に当たりそうなモノが入っていた。
「もしや……もしやっ……！！！　俺が独自で今まで隠し撮りしてた、秘蔵の主コレクションがバレたのかぁあああああーーー！！！！」
《……》
「のぉおおおーーー！　こればっかりは消せねえぜぇええーーー主ぃいいいーーー！！！」
フォルダに入っていたのは、フィルスターが物心ついた頃からちょくちょく集めていたギラムの様々なシーンの画像だった。自身がマシナリーである事を良い事にカメラ機能を乱用したのか、仕事先での行いやトレーニング施設で汗をかいている瞬間。自室でシャワーを浴びている瞬間や着替え中の彼の画像まで、出てくる出てくる主人への溺愛への賜物の数々。
もし仮にこのフォルダの中身を見られていたのであれば、彼が帰ってこない理由に当たるのではないか。そう思ったフィルスターは苦悩しながら叫び声を上げ、再びビジフォンの上に突っ伏した。余談だがここまで行くと、ストーカーレベルである。

ウィーンッ

「フィル、何を騒いでいるんですか。扉の先まで雄叫びが響いてますよ。」
そんな彼の雄叫びが止んだ頃、マイルームの扉ロックを解除する音が聞こえた。入って来たのは彼と同じ部屋で仕事をしていたリニログーンであり、食料の調達を終えたのか紙袋を持ってやってきた。軽く扉の先まで声が響いていた事を知らせるも、相手からの返事が無かった。
「うぅぅ……」
「？　何を見ているんですか？　……おや？」
珍しく返答が無かった事に違和感を覚えたのか、リニログーンは奥に居るフィルスターの元へと向かった。するとそこには項垂れる様に机に突っ伏している彼の姿があり、彼の頭上には開かれたままの画面が存在していた。遠目に何が出ているのか解らず、リニログーンは持っていた紙袋を置き、彼の元へと向かって行った。
そして、展開されていたままの主人の画像集を目にした。
「……！？　フィ、フィル……」
「うぉげっ！！？　リニロ、何時の間に……ってぇえ！！！」
一般層の目が目撃したら気味悪がる光景を目の当たりにし、リニログーンは肩を震わせながら込み上げてくる感情を抑えてる様に言葉を漏らした。不意にやって来た声を聞きフィルスターは起き上がるも、様子がおかしい彼の目線を辿り、開かれたままの画面を眼にし驚愕した。
慌てた彼は弁解をしようと慌ててフォルダを閉めようにも指が動かず、諦めた彼は背中で画面を隠しながら言い訳を考えた。しかし、良い言い訳が浮かばない。
「あ……あぁ……！　貴方ってマシナリーは……！」
「こ！　これはっ……！！　えっと！？！？！」
「やっぱり……

　主が一番理想の『主』だって思ってるんですねぇえええ！？」

「えぇっつ……　へ？」
そんな中肩を震わせていたリニログーンは、彼の様子を気にせず画像を見た感想を彼にぶつけた。気が付けば彼の瞳には煌めきに満ち溢れた輝きがあり、とても良い物を見たような目をしていた。
唖然とするフィルスターを軽く横にずらしながら画面を見て、リニログーンはうっとりしながら画像一つ一つを見ていた。
「まったく、こんなにいっぱいコレクションがあるなら自分にも一部見せてくれたっていいじゃないですか。ズルい先輩。」
「お前……引かねえの……？」
「引く？　何でですか？」

「ぇ……ぁー……いや……　なんつーか、言うのも変だが。俺等男同士だし……」
とはいえ、フィルスターからしても納得いかない部分が一つあった。画像そのものに対する反応が普通では無かったのも含め、それを所持していた自分と主人の性別にも違和感を覚えたのだろう。異性であれば種族そのものを無視して感情を抱いても不思議では無い物を、同性の相手へ対し彼は抱いている。
普通に考えれば、否定的にとらえられる事が世間の捉え方である。
「らしくないですね、フィル。」
「え？」
「貴方はどんな時だって、ギラムが好きだと言うじゃないですか。なら、今更過ぎる質問です。恥ずかしがらなければいけない程、何かしてるんですか？」
「……　盗撮……とか。」
「それくらい、ヒトの『愛』とやらが許してくれますよ。主は優しいです。」
とはいえ、リニログーンからしたら愚問過ぎる問いかけだった様だ。彼がこの部屋にやってきた当初から、フィルスターの主人愛は彼が予想していたモノを越えていた事は解っていた。仮の名義人であるギラムに許可を貰ってから今まで部屋を行き来し、彼が主人へ向けるまなざしが普通ではない事も解っていた。その上主人に隠れて盗撮を行い画像を集めていた所を見れば、それはもう紛れもない事実だ。
それが解った時点で、リニログーンは彼へ対する考えを纏めたため、それを超える何かをしなければ驚かれる事はもう無いのだ。自分自身も主人が大好きなため、同士であるとわかれば何も言う事もない。
「……そっか。そうだなっ　怒られる覚悟で、帰ってきたらちゃんと言おう！！」
「はいっ！」
その後意見を交わし認められた事を知ると、フィルスターは釈然としない表情を見せながらも、原因が何であれこの事を素直に報告しようと決めた。その時だった。

ピピピッピピピッ

「？　何だ、俺の所に通信何て……　……！？　主！？」
画面を閉じようとしたフィルスターの通信機が着信音を告げ、誰かから通信が入った事を知らせた。音を耳にした彼は違和感を覚えながらも誰から来たのかと推測し、真っ先に思い浮かんだ相手からのモノであろうかと通信を繋げた。

ピッ

「もしもし主！？」
【ぁー残念だが違うぞ。ギラムのパートナーマシナリーは、この回線であってるか？】
「……なーんだ、主をこき使ってる上司か……」

【ぉいこら、今はこきは使ってないぞ。それよか、回線はあってるかー？】
「ぁ、はいっ　どうしました、クラウチさん。」
繋がった先の画面が展開される前に彼は叫ぶも、画面先の相手は軽く否定しながら繋いだ先があってるかどうかを確認していた。通信を送ったのは彼等の務めているリトルウィングの上司である『クラウチ』であり、主人であるギラムへ対する連絡があった様だ。しかしそんな彼の要件をスルーしながらフィルスターは再び突っ伏しだし、電話先の相手が上司であろうと変わらない返答を行っていた。普通であれば丁寧に応答する彼ではあったものの、馴染みのある相手の為か遠慮のない一言であるが、普通であれば罵倒されても文句ない発言だ。
とはいえ、そんな彼の言葉に軽く訂正を入れるだけの心の広い上司であった。そんなフィルスターの応答を見たリニログーンは慌てて通信機に割り込み、彼の代わりに合っている事を告げ要件を聞きに入った。
【ぉ、合ってたな。急ですまないが、いつものメンツを俺の所に集めてくれ。大事な話がある。】
「大事な……」
「話……？」

【お前等の主の、話だ。】

「！！　すぐ行きますっ！！」
告げられた要件を聞き、二体は眼を見開かせた後同時にそう叫び、通信を切った。

「……」
いつもの仕事場に、いつもの昼下がり。喧しい娘の様なエミリアとの昼食を終えたクラウチは、デスクへと戻りあるニュースを見ていた。いつもの漂々とした軽い笑みを見せる彼とは違い、今はとても真剣な顔付をしている。まるで、以前の仕事場での彼を思わせる、そんな顔つきだ。
《以上！　グラールチャンネル５、ニュースキャスターのハルでしたっ！》

ピッ

「サツが動き出すのも、時間の問題か……　まったく、アイツがんな事するわけねえだろうが。」
「？　ドシタノ、シャッチョサン？」
軽く苛立ちを感じさせる呟きを漏らしながら、クラウチはニュースを消し椅子にもたれる様に身体を倒した。そんな彼の様子を見た受付嬢のチェルシーは、いつもの口調で彼の元へと近づき声をかけた。
「ちっとな。最近、通り魔が現れるってニュースが騒がれてるだろ。ニュースじゃ詳細情報は伏せられてるが、昔のよしみで先に情報が回って来た。」
心配し様子を見に来た彼女に対し返事を返すと、彼は自分が軽く苛立っている理由を彼女に見せた。手慣れた手付きでデスク上に画面を展開し、彼はあるフォルダ内に保存していた画像を呼び出した。するとそこには、先ほどのニュースでは流されていない極秘の写真風景が映し出された。
映っているのは、紅色の鎌を持ち相手を襲う金髪の青年の姿。
「……！！　コレッテ……」
「あぁ、高い確率でアイツだ。二日前から発生しだして、徐々に件数が増えて行ってる。このままじゃ他の企業内で情報が回されて、いつぞやの事件の様になる。」
「デモ、マダ彼ダトハ決マッテ無インデショ？」
「だから、事前にリサーチをな。今ギラムのパーティメンバーを招集したから、時期に来る。チェルシーは情報を嗅ぎ付けようとする輩の、電話応対を頼む。」
「ワカッタワヨー」
写真を目の当たりにしたチェルシーは驚きながら、自身が知っている相手が犯人なのかと不安になった。彼女の心配が正しいかどうかが明確ではない今、クラウチはどうするかを考え手を打つことが出来ず、そのまま時間が流れれば大変な事になると予測していた。いつぞやの傭兵達が集う企業に対し、大規模に通達された『ナヴァル狩り』の様に、彼も犠牲者となってしまうのではないか。クラウチが心配しているのは、その一点のみだ。
あの事件の真相を知っているのは、彼等のパーティメンバーでもメアンとラスベリーを除く四人。そしてクラウチとエミリア、ウルスラとチェルシーを入れた合計八人であり、犯人確保に借り

だしたのはマシナリーのみのため、事実上記憶しているのはその人達だけだ。事件は丸く収まり必要以上にナヴァルが狩られる事は無かったものの、ギラムも相当心にダメージを負っていたはず。口や表情からは見せなかったものの、昔の友人を亡くした彼が同様の事件の別側になるとなれば、自分達も辛いのだ。
どうにかして彼がクロかシロか、早く知りたい気持ちが先走る彼なのだった。
『何がどうなってんだかな……　……あの時のナヴァル事件と一緒で、理由があればいいんだがな。』
そんな親心の様な気持ちを抱きながらも、クラウチは呼び出したメンバーが到着するのを待っていた。

ウィーンッ

「クラウチさん、ただ今到着しました。」
「おっまたせー」
「おぉ、ようやく来たか。」
しばらくし時間が経った頃、彼等の居るオフィスの扉が開いた。やって来たのはギラムを除く『ジュライ☆エターナル』のメンバー六人であり、不在の彼に変わってアリンが先頭に立っていた。
「早速ですみません。クラウチさん、お話の本題を」
「の前に。お前等に聞かないといけない事がある。それに答えてもらっていいか？」
「おね……　ぁ、はいっ」
連絡を貰い呼び出された理由を聞こうと、アリンは口火を切ろうとした。しかしそんな彼女の発言を遮りながらクラウチはそう言い、告げる前に知らなければならない事を聞かせて欲しいと言った。
途中で変わる話題に多少驚きはしたものの、皆は頷き彼の質問を聞く体制に入った。
「お前等、リーダーのギラムと会ったのは何時が最後だ？　んじゃ、お前さんからな。」
「ぁ、はい。私がギラムさんとお会いしたのは、リニロさんが所属を決定する際の招集が最後です。」
「僕もアリンさんと同じです。その時が最後で、今日も見かけていません。」
質問の内容を告げられると、先頭に居たアリンは質問に対し正直に答えを述べた。彼女が最後にあったのは、フィルスターとリニログーンがパートナーマシナリーとしての権限を奪い合っていた、結果発表の時だ。
元々依頼には出ない彼女ではあったものの、その日からしばらくはウィンドベルと共に鍛錬を行ったり、趣味に時間を使ったりとしていたからだ。フィルスター達の招集を聞くまでは、三日前から帰っていない事を知らない程である。
「ん、じゃあ次。」

「アタシ達が最後に見たのは、その後かな～　ベリリーと食材の買い出しに行って、リニーをお部屋に置いてきた後……だったかな？」
「ミスターはそう言ってたぜ。配属されたホームに送ってたそうだ。」
「それって、何時頃の話だ？」
「確か……　五日くらい前かな？」
次に問われたメアン達が最後にあったのは、報告会があった翌日。無事に申請が通り新しい部屋に配属された事になった彼を送るため、フィルスターを部屋に残しリニログーンと共に住居区を出歩いていた時だ。配属先が誰であるのかは知っていたリニログーンを見て、顔馴染みであるギラムは軽いコミュニケーションを取りながら歩いていた事。向かった先での部屋主の所でしばらく滞在し、やるべき事が完璧にこなせる様になってから再び顔を出す事など、さまざまな事をメアンは聞いていた。
しかし詳しくは覚えていなかったため記憶があいまいな所は、内容に無頓着だったのかもしれない。
「ん、残るはお前等だ。ギラムの一番近くに居るお前等は、最後に見たのは何時だ？」
一通りマシナリーでは無い二人の話を聞き終えると、クラウチは顔を動かし一番長い時間接しているフィルスターの顔を見た。ウィンドベルの隣に立っていた彼はそれを聞き頷くと、リニログーンも同様に頷き問いかけに対し応えだした。
「俺等が最後に見たのは、三日前の昼時。俺等がビジフォンで調べ物をしてる間、依頼を受けるって言って惑星ニューデイズに見送ったのが最後だ。」
「あぁ、確かにそれは覚えてるぞ。アイツ一人で依頼に行くって言って、俺の所に許可を取りに来たからな。」
正確な日付と時間を告げた後、フィルスターはどういう状況で主人が依頼に出向いたかを話した。その場には居ない射道具の修理方法を探るために自分達が調べている間、自分達の邪魔をしないようにと気を使ってくれた主人。しかしその配慮が裏目に出てしまった現状が不安ではあるものの、フィルスターはちゃんと伝えなければならないと思っていた。
心配しているのは自分以外にもその場におり、目の前で自分を見ている上司も心配している。リニログーンとは違い確信は無いものの、彼にも解る空気が漂っていたのだ。そんな彼からの報告を聞き、クラウチは彼が依頼へ向かうためのマイシップを申請した日付を確認しようと、端末を弄りだした。
「確か、その日でしたね。主の所に届」

バッ！

「けモゴッ！？」
「ん？　どした？」
「いえっ！　何でもありますぇえん！！」
上司が軽く作業をしていたその時、リニログーンはやって来た届け物の話をしようと口を開いた

。しかしその内容を悟ったフィルスターは慌てて彼の口を閉じようと両腕で彼の口をはさみ込み、軽く暴れる部下を尻目に上司へ返事を返した。作業をしようと目線をずらしていたため何が起こったのか解らず彼等の様子を見た後、首をかしげながらもクラウチは再び依頼リストを確認し出した。
それを見て軽く安心したのか、隣で目を丸くしているアリン達にアイコンタクトを送りながら、フィルスターは顔を前へと直しリニログーンと小声で談義し出した。
『何するんですかフィル！？』
『んな匿名の情報言うんじゃね！　主がもし身元不明の奴に利用されたって思われたら、主が不利になんだろ！！』
『！！　す、すみません……』
軽く聞こえているか聞こえていないか解らない発言を彼等の中で行った後、暴れていたリニログーンは大人しくなりフィルスターは手を離した。少々落ち込んでいる様子を見せる中やり取りが終わったのを見て、クラウチは咳払いをした後彼等に話をしだした。
「……まぁ、いいか。とりあえず最終的な結論として、お前等が最後に見たのは三日前。それでいいか？」
「はい、それで大丈夫です。」
「ん、となると時期的に見てもシロにはし辛いか。解った、じゃあこっちからの情報だ。」
身近にいる人々の話を聞き終えた彼は、最終的に確定できる判別は下せなかったものの、呼び出した要件を伝えだした。本題を話しだす上司の言葉を１つ１つ聞き逃さない様にしながら、フィルスター達は耳を傾けた。
「二日前から少しずつ報道されだされていた『通り魔』事件を知ってるか。」
「ぁっ、アタシ見たよー　犯人は『紅い鎌』を持ってる……現代の死神？　だったかな？」
「まぁそれは情報を見た奴等の『呼び名』だな。……で、それを持ってた奴の画像が、ピンボケだがこっちに回って来てる。見るか。」
「……はいっ　俺等が呼ばれたって事は、それが主に関係している。そう言う事なんだよな。」
「ん、やっぱりギラムの相棒は察しが良いな。コレなんだが、どう思う。」
呼び出した要件と最近流れている事件の概要を話した後、クラウチは目の前に展開した画像を彼等に見やすい様に反転させながら見せた。そこに映し出されていた写真を見た一同は一瞬彼なのではないかと疑うものの、何処か正確性に欠ける様子で次々に首を傾けだした。
「……　……ギラムさん……なんでしょうか。」
「髪色とか肌色とかは似てるけど、ギラムってもうちょっと雰囲気が良かった気がするけど。」
「まーなー　主ってこんなに死神じみてないし。」
「ん、やっぱりお前等にもそう見えるか。だが詳細な情報はまだ出てないが、事件の真相を確かめる権利は俺達にもある。ギラムでない事を証明するためにも、お前等に極秘で任務をしてもらいたい。」
「ぁっ、はい。」
最終的な結論は不明ではあったものの、極秘で写真が回っている事だけは彼等も知る事が出来た

。幸いにもギラム本人が犯人だと言う断定はまだ出来ておらず、写真を見た限りではとても彼が犯人だとは思えなかったのだ。
勇ましくも勇敢に戦う彼の姿は想像できるものの、彼本人がソードを使った事は無い。基本的に使うのはツインダガーとハンドガン、そしてウォンドが主であり、ブレイバーの彼が両手持ちの大きな武器を、死神だと呼ばれるくらいの勢いで振り回すだろうか。そういった疑問点から彼等も判断出来なかった様子で、クラウチ同様に唸りながらも命令を受ける体制になった。
「ギラムを探して来い。　以上だ。」

「了解！」
彼等に極秘で捜索する様告げられた内容、それは彼等のリーダーであるギラムの捜索依頼だった。

組織の上司に呼び出され、要件を告げられたアリン達。極秘に任された依頼を遂行するために、彼等は一度ギラムのマイルームへと集まっていた。
「さーってっと。何か別で大事になっちまってるみたいだし、速く主を探しちまおうぜ。」
「そうですね。それで主が無実だと解れば、疑いもすぐに晴れるそうですから。」
「ん、じゃあとりあえず手分けして捜索するとして……　問題は『何処を探すか』だな。」
普段であれば指揮を取るはずのギラムを捜索するとなり、彼等にとって出始めが肝心となる今、捜索場所の検討から始まった。彼が行きそうな場所をピックアップし、消息を絶った惑星ニューデイズとの関連性を考える。
初歩的な行動しか出来ないものの、今の彼等にとって行動そのものに無駄な時間を費やす事が出来ないのだ。彼等のリーダーであるギラムが、もしかしたら巷を騒がせている『通り魔』なのかもしれない。しかし彼等は上司に見せられた写真に対する疑念がいくつか残っており、まだ完ぺきな手掛かりは得ていない。そのため、写真との関連性は考えない検討を行っている次第だった。
「……あの、フィル。」
「ん、どうしたベル。」
「僕達は、どうやってギラムさんを探せばいいんでしょうか？」
自室に置かれたテーブルを囲み会議体制に入ると、各自で使用している端末を弄りながらウィンドベルはフィルスターに問いかけた。捜索する事となり行動そのものまでは決めたものの、肝心の移動先がまだ決まらない。
そもそも何処を探せばいいのかさえ解らない彼は、一番そばにいて行動を見守り、今回の重要な鍵を握るであろうフィルスターに頼る事しか出来ないのだ。問われた彼は一瞬不思議そうな顔をするも、すぐに自信満々にこう言った。
「かーんたんさ。主の通信機に連絡を入れて逆探知をして居場所を掴めばいいんだからさ。」
「フィル、通信機はここ三日間通じた事ありません。」
「ぁーっと、そうだった。んじゃあ、主が借りて行ったマイシップの着信で」
「逆探知は外部から元々出来ない様になっていると、貴方が言っていたはずです。フィル。」
「ぉおっと……　んーじゃあ……　えっと……　……」
彼の提案した方法、それは各自で使用している端末に元となる発信源を発生させ、それを得意の逆探知で知るというもの。元々追跡座標を表す事の出来るソフトがインストールされているため、電波さえ拾う事が出来れば出来るだろうと彼は考えていたのだ。しかし現状で主人への通信が繋がった事は無く、消息が途絶えた三日前から通信は繋がらず、元となる電波が発生できないとリニログーンは言った。
次に提案したのは、社員達が使用しているマイシップにアクセスし座標を割り出す方法だった。元々スペースコロニーで生活をしている彼等にとって、惑星へ降り立つには船を使用し移動するしか方法が無い。そのため使用した船の居場所さえ特定できれば、最低でもどの惑星に居るかが

解ると彼は踏んだのだ。
だがその案もリニログーンに否定され、否定された理由は言いだしたフィルスターの助言によるものだったのだ。提案するも中々成立せず、フィルスターは考えるも案が途絶えてしまった。
「……　ユー達のマスターは、何処へ出かけたんだ？」
「えっと、惑星ニューデイズの……『昇空殿』だったかな。」
「何処の『昇空殿』だ？」
「それは……」
そんな彼を見て助け船を出そうと、ラスベリーは主人が何処の依頼に行ったのかを質問した。質問に対しフィルスターは曖昧ながらも記憶を辿り、行ったであろう依頼先を告げ、さらに詳細を説明して欲しいと頼まれた。だが彼はそこまでの情報は得ておらず、中間報告で電話をした際も肝心の依頼データは全て依頼が終わった後に主人に提供してもらっていた事を思い出した。
そのため、そばに居て依頼を手伝わなかった今回は、何の情報も持っていなかったのだ。
「……　悪い、何も知らない……」
「フィル……」
質問に対する返答が出来ずフィルスターは頭を下げると、ラスベリーは首を横に振り本当に手詰まりである事を悟った。彼の落胆した様子を見たメンバーも軽いため息を付くほどであり、フィルスターは自分の行動に不足部分があった事を思い知らされた。
今まで完璧に行えてきたはずの依頼は全て主人の提供されるデータがあってこそであり、同行した際も留守番をした際も、彼は必ず依頼の詳細データをくれたのだ。頂いたデータは全てフィルスター本人が管理し、次回類似した依頼があった際はどういう事を気を付けなければならないか、どういう事をすれば時間短縮を行えるかを演算し主人の手助けを常に行った。だからこそ気が付かなかった部分を目の当たりにした今、自分だけでは何も出来ていない事を知ったのだ。
全部が全部、主人の優しさによって自分の仕事がより上手く発揮できていた事を。
「じゃあじゃあ。フィルル、その昇空殿って所をぜーんぶ当たってみたらどうかなー？」
そんな彼等を包む不穏な空気を書き消そうと、メアンはある提案をした。それは依頼先で向かった場所そのものを目標として行動し、全ての施設を手当たり次第回ると言うものだ。とても時間が掛かるうえ効率的では無いとは思うものの、その場に向かったと言う痕跡が残っているからこそ出来る手段とも言えよう。
しかし、
「マスター　三日間も行方をくらませている相手が、同じところに居たら依頼先からテレフォンが来るはずだぞ。」
「ぁー、そっか……　じゃあじゃあ、ニューデイズのホテルとか？？」
「そんなもの、ナッシングだからこそマイシップにステイ出来る設備があるのだろう。」
「んー」

「八方塞って奴？」
「うぐっ……」

彼女の提案した案はどれも『当日』でなければ効力が薄くなるものであり、長期間潜伏していたとしても同じ場所に居るかすらわからないものだった。相棒に全て否定され言葉を詰まらせた彼女の発言には、フィルスターの抱いていた辛さをより強くさせるものでしかなかった。
「メアンさん、それは言う言葉ではありませんよ。」
「あちゃーやっぱり？？」
終いにはアリンに今言うべき発言ではない事を告げられ、軽く反省するかのような態度を見せる始末。再び集団内にため息が飛び交い、再び暗い雰囲気に包まれてしまっていた。

そんな面子を目の当たりにしたフィルスターは肩を落とし、捜査していた端末に乗せていた手を下ろした。
『俺、主の所に配属されて全部を知り尽くしてるつもりだったけど……結局、主の後を辿る事しか出来てなかったのか。主の行動を全面的にサポート出来てると思ったけど、それは全部……主の努力と報告があって成り立ってた事だ。主が俺を依頼に連れて行ってくれなかったら、データでしか他の連中の事なんて知れない。なんで、今まで気づかなかったんだ……』
どんな時でも集団を纏めていた主人が居れば、恐らくこんな状況さえも打破できるアイディアを出してくれたかもしれない。彼の事を支えるために行動していたフィルスターは常に主人を見ていたが、それはあくまで主人の依頼外の行動を見守っていた。依頼に関してはほぼ全て主人から提供されたデータがあってこそ、互いに作戦を練り必要な準備を行う事をフィルスターにとっての腕の見せ所に過ぎなかった。
行動そのものを取れば主人は必ず笑顔でお礼を言ってくれると、彼は思い込み信じ、互いの信頼を持って今まで生活してこれた。だがそれが欠けてしまった今、依頼を進めるどころか手がかりすら浮かばず、時間が経ってしまった今になって行動している自分が情けなかったのだ。
『主に頼りにされて、主との毎日が楽しくて、楽しくて……　頼りに……されてた……様に、思ってたのかな……　俺……』
以前の彼と主人であればもっと早く気づけたであろう事態を、仲間が出来たがゆえに不安視する仲間を落ち着かせる事を視野に入れていた。そう、いつの間にか彼の仕事は『主人』から『主人を囲む仲間』へと切り替わり、こんな事態になってしまったのだろう。彼は勝手ながらもそう思い込んでしまい、どんどん気分が落ちて行く感覚を覚えていた。
『俺、本当に主に頼りにされてたのか……？　配属された俺の事を知って、俺の居場所を作ってくれてたのは……主の方だったのか？　俺じゃ、何も出来ないのか……？』
「フィル。」
終いには主人に頼りにされていたのであろうかと疑い出し、彼は自分の妄想によってどんどん落ち着かない様子を見せだした。不意に発せられた外部からの声すらも拾えず、彼は自然と耳元に両手を置き、俯き出してしまった。
『俺……　俺……あるじ……に……』
「フィル！」

ガシッ！

「……？　リニロ……？」
心の中で自分を責める発言を繰り返していると、不意に彼の両手を掴む感触がやってきた。突然の事に驚きゆっくりと目を開けると、そこには自分の目を見る機械的な赤い竜が立っていた。しかし何処か視界が潤んでおり、彼は何時の間にか涙を流していた事にも気が付いた。
「主を疑う様な事で、悩まないで下さい。貴方は貴方の信じた主のためにと、誠意を突くし行動してきた。違いますか？」
「ぇっと……」
「貴方には主であるギラムが必要で、ギラムも貴方の事が必要だった。そう思えた日と、思えなかった日……　どちらが多いんですか！」
「リニロ……」
突然の事に動揺する彼に対しリニログーンは問いかけ、彼の事を励まそうと必死に言葉を放った。しかしそれでも自信が持てない様子を見せる彼に対し、リニログーンは半分泣きながら言葉を叫んだ。何時の間にか両手を握っていた腕も震えだしており、気が付けば二体は涙を流しあっていたのだ。
「貴方は立派にギラムのそばに居られるだけの実力があって、ギラムも貴方が必要だと感じるからこそ、貴方の元に連絡を細かく送ったんじゃないんですか！？　何で今更そんな事を悩むんですか！　貴方はギラムのパートナーマシナリーなんでしょう！？　そんな事で……そんな事で、悩んで……！　主を疑わないで下さい！！！」
「……」
「あの人はとても立派で、自分が最初からそばに居られたら……どれだけ幸せな日がやってくるかなんて……考えなくても解ります。貴方の事が羨ましくて、あの時は嘘をついてまで貴方の事を降ろそうとしました……　でも、貴方の実力には敵いませんでした。」
「リニロ……」
「あの人が求めてるのは『前に立って護ってくれる相手』ではなくて、常に自身の後ろに立って『背中を預けられる頼もしい相棒』なんだって……　自分は、常に後ろは立てません……」
周りの面子からの視線が集まる事も気にせず、リニログーンは一生懸命にフィルスターを励ました。配属されてからまだ一度も月を跨いでいない今ではあるものの、彼にとっても主人であるギラムはどれだけ優しい人であるかは、考えるまでもなく答えを言えるほどの人だった。
嘘をついてまでその場に居座る事を提案した時から、ギラムは自分の事を見て様子を見守り、どんな無駄な言い争いをフィルスターとしても常に笑っていた事。毎日毎日無駄な事をしていると自分の中で感じている日であっても、ギラムはどんな些細な事でもお礼を良い、自分達にちゃんとした評価を見せてくれた事。そして何よりも嬉しかったコトバの数々は、疑いさえも吹き飛ばすとても大切な記憶だった。リニログーンには確証になる手段があるとはいえ、例え問いかけたとしても主人はきっと言っただろう。

【ギラム(俺)の事を理解してくれているパートナーマシナリー(相棒)は、フィルだけだ】と。
「だからお願いします、フィル。そんな事で、主を助けられないなんて思わないで下さい。主は貴方の行いを全て知っているだろうし、貴方がどんなふうに主を見ているかなんて……問わなくたって、返答はきっとあっています。フィル、自信を持って下さい。」
「お前……」
「ギラムの足取りは、後から配属された自分達には……きっと探せません。ずっとそばに居た貴方でなければ、尻尾すら掴めないと思います。だから諦めないで下さい！」
どんなに対抗したとしても、どんな部分で勝っている部分があったとしても、自分はフィルスターに勝てない。リニログーンはそう確信した残念な出来事すらも言葉にし、彼の事を必死になって励ました。
とても降ろそうと考えていたライバルからの発言とは思えず驚いていると、フィルスターは自然と両手を握り返し降ろしている事に気が付いた。どうしてこんな相手からの言葉で感動しているのかと不思議に思う気持ちがある中、不意にやってきた周りからの声に彼は顔を動かした。
「私はギラムさんの背中を追うのが精一杯で、とてもではありませんが自分で何かをする事は……ベルちゃんが居ないとできません。私達はパートナーマシナリーであるフィルちゃん達の力があるからこそ、安心して任務に励む事が出来るんですよ。」
「そうです。例え僕達に出来る事が最低限、最小限だったとしても、主人の皆さんは絶対に喜んでくれます。ここに家族で住んでいる人が居ないからこそ、心のゆとりを作ってあげる事も、自分達パートナーの仕事ではないでしょうか。」
「……」
「そうだよーフィルルー　アタシも、ベリリーが居なかったら。いっつもお料理をするのも、お掃除をするのもお手本が無くて、ずっと同じことの繰り返しをしていたと思う。アタシ達にとって完璧な部分が完璧じゃないって言われると、アタシ達って……おさきが真っ暗に感じちゃうんだ。」
「ゆえに、マスター達の行動を気にする事は重要であり、プレイ状況に対する策を練るのは当然だ。ユーはそう言う面を取っても、ミー達全員劣っているのさ。」
「だから、フィル。止まらないで、主を見失わないで……一緒に探しませんか？」
「お前等……」
次々にやって来た言葉を聞いて、フィルスターは再び視界が潤んだ事に気が付いた。先ほどから何で泣いているのかも解らなかった彼ではあったものの、周りを取り囲むアリン達の言葉をしっかりと聞いている事だけは分かった。
そして、確信できる感覚を彼は１つだけ知る事が出来たのだ。周りの皆は、自分の事を主人の相棒だと認めてくれている事。そして主人が相棒である自分の事を、待ってくれている事を知る事が出来たのだった。
「……　……そっか。俺の気まぐれで発足をして、主の迷惑や負担ばかりかけてたと思ったけど……意外と、違う方向に進んでたんだな。今なら、主がメンツのリーダーを引き受ける理由、解る気がする。」

掴まれていた手をゆっくりと上げ、彼は頬を流れる涙を静かに拭った。どんなに言いだしたその時に明確な意思が無かったとしても、今の環境を纏める主人がどんな気持ちで毎日を過ごしていたのか。依頼を行う際も手伝って欲しいと頼む際も、どんな気持ちで毎回自分にお願いをしてきたのか。今まで知る由も無かった瞬間を知る事が出来た今、彼は主人を疑っていた自分を馬鹿にするほどのやる気に満ち溢れていた。
『主もきっと、悩んだ時や誰かの力になりたいって思った時に……こういう気持ちになれる事を、きっとどこかで知ったんだよな……　そうじゃなきゃ、こんな無利益な事を常にしようだなんて、絶対に思うはずねえもんな。』

「……解った。探そう、主を。」
「フィル！」
「それでこそユーだ！」
その後彼は威勢よく返事を返し、目の前に立っていたリニログーンを瞳を一瞥した後、皆に向かって叫んだ。彼の声を聞いた同士達は歓喜し、今までの彼に戻った事を喜んでいた。その時だった。
【まったく、世話の焼ける連中だ。】
「ぇっ？」
彼等の元に、聞きなれない声が聞こえたのだった。

【お前等は俺にあれだけの事を言っておきながら、結局は頼らざるして自力では出来ない様だな。】
「この声……！　シノワン！？」
不意にマイルーム内に響き渡る声を聞いた一同は、その声に聴き覚えがある様子で相手の名前を叫んだ。声を発していたのは備え付けのスピーカーからでも、外からの音声器具からでもない、同じ自室内に居た射道具『ディーラカーナ』だった。不意に飛び出した射道具を見た皆は驚くものの、メアンからの呼ばれ方に反発し空気は一変、軽くムードが壊されたかのようにも思えた。
【シノワン言うな！！　ビート様と言え！】
「ぇー　絶対シノワンの方が可愛いのに～」
軽く怒鳴る射道具ではあったものの、彼女は呼び名を変えるつもりは無く、何故か不服そうな顔をしながら相手の事を見ていた。マイペース過ぎるメイドの意見に反感を買ったのか、救われたのか解らない現状である。
【可愛さなど求めとらん！　……失敬。何やら大事が起こっている様だな、ジュライエターナル。】
「ぁ、はい……　フィルちゃんの主人であるギラムさんが、三日前から行方不明になってしまって……　探しに行きたいのですが、何処を探したらいいのかが解らないんです。」
しかし話が何故か前に進む事は変わらずであり、音声の主は『シノワビート』である事が判明した。どうやら壊れかけの射道具そのものに意識を潜り込ませる措置をしていた様子で、元からこの場に潜入する意志があった様だ。見方を返れば『不法侵入』に等しいものの、皆はその事柄に関しての突っ込みを入れず、相手に事情を説明した。
【ふむ。……で、座標による追跡や回路からの逆探知も出来ない、と言うわけか。】
「あぁ。主の回路は、依頼の中間報告を受けて喋ってた時に切れてから、ずっと繋がらねえ。逆探知そのものは主には必要性を感じなかったから、主が感じた時以外俺からの操作は出来ない様にしたんだ。俺と主との間での合意だから、俺も破るつもりは無いし、手の打ちようがない。」
【相変わらずの甘い考えが、聊(いささ)か緊急時の指令塔無しには手詰まりとなる。典型的な例と崩壊が起こったと言うわけか。甘いな。】
「フィルを悪く言わないで下さい！　僕達は信頼を持って主人と接し、フィルは合意をしてその回路を自ら捨てたんです。本当の信頼が確立していなければ、フィルは捨てなかったはずです。」
彼等には彼等なりの考えがあったものの、相手からしたら甘い考えによる現状の後手化が原因であると確信した。主人を大切に想うフィルスター達の意見を聞いた彼は、それからは一人で行動し作戦へ対する見直しを行っていた。パートナーマシナリーの一部とは別の機会で会う事により情報共有を行い、彼等と同じ考えを何度も耳にする事が多かった。
しかし同時に修正する方向性には類似点がずれる事が良くあり、彼は意見を言い放ったギラム達の考えを間近で見ようと、この場に潜り込む策を行ったのだ。だが平穏な空気が一変し状況が悪

化したのを見て、彼は公開するには早すぎるであろうと思いながらも、彼等に声をかけてきたのだ。仲違いする事は難しいものの、それでも彼はフィルスター達の行動振りを見たかったのだ。
【まぁ、過ぎた行動は仕方がない。お前等、結局はあの金髪ビーストが何処に居るのかが解れば、行動出来ると言いたいわけだな。】
「金髪ビーストって言うなっ、俺の自慢の主『ギラム・ギクワ』だ！　よーく覚えとけぇいっ！」
【存ぜぬ。……まぁ、あの時の礼をしてないのも事実。居場所を特定する手段が、ない事も無い。】
「ぇっ、あるのか……！！　主が何処に居るのか、知ってるのか！？」
【その手の包囲網は、事前に張ってあったからな。まぁ、するまでもなく終わったのも事実、過去の産物とだけ言っておこう。……だが、タダではやれないな。】
そんな彼等に助け船を出そうと、シノワビートはある提案を申し出た。思考回路に潜り込むプログラムは元々彼が得意としていた分野であり、ハッキング等々を行えるフィルスターから見ても中々の腕前の持ち主だ。彼もまた思考回路に意識を組み込んだ存在とも言えるため、事前に緊急時へ対する策をすでに行っていても不思議ではない。
しかし素直に渡すような相手でもなく、返事によってはやらなくもないと提案してきた。
「ぅっ、今になってまた同じ行動をしようて言うんだったら……　た、頼……頼って……欲しくないんだからなっ！」
「フィルルー、それじゃどっちか解んないよー」
返答しだいによっては再び過去の行いをしなくてはならないと思ったのか、フィルスターはどう返事をすべきか迷った。主人を助けたい一心で相手のために意志を見せようものなら、再び自分の身体を乗っ取られあらぬ行為をしかねない。それによっては助けた側の主人に再び迷惑をかけてしまうためか、とりあえずの返答をしようと一生懸命に言葉を絞り出していた。
だが言語に不一致があると突っ込まれるほど、彼の言った言葉は矛盾していた。おまけに語尾に普段使いそうにもない口調を言ってしまうほど、今の彼は混乱している事が良く分かる発言であった。
【相変わらず、頑固者で個性派揃いだな。他のマシナリー達とは違って、ただ造られた思考回路を使用した行動とは、違うわけか。】
「えっ？」
【独り言だ。前例の作戦を行うわけでは無い、ただＧＨ５０１フィルスター　お前の意見を聞くだけだ。】
「俺の……？」
とはいえそんな返事を聞いた相手は、特に溜息等々をつく事はなく彼に質問をした。返事とはその質問に対するものであり、彼が思う過去の行動を再度行うと言う条件では無かった様だ。軽く安心したフィルスターではあったものの、自ら指名してきた事に驚きながら、射道具の事を見た。

【お前は幾ら情報をかき集めたとしても、主人の心の闇は明かされなければ知る由もない。知らずして行動ををしたとしても、空回りをし互いに暗い闇を知るだけだ。過去にどんな仕打ちを受けた事も、どんな醜い行いをしてきたかも、明かされなければ知れないだろう。ＧＨ５０１フィルスター、お前はそんな主人の堕ち込む姿を見たとしたら、お前はどうする。】
「主が、落ち込む……？」
【お前等が考えているほど、今の主人の状況は甘い物じゃない。古に封印されたはずの力が解放され、奴の心を蝕みだした。手遅れになれば、死ぬだろう。】
「主が……死ぬ、だって……！？」
【ゆえに、お前等は早急に出なければならないだろう。だが無事に助け出したとしても、心優しい主人の事だ。病む事も目に見える。お前はその時、どうする。何をする。】
「……」
質問してきた内容を聞き、彼は一刻も早く助けに行かなければならない事を知った。現状がどうなっているのかさえ解らないため、相手の言った事が全て正しいかは解らないものの、彼にとって主人の危機は見過ごす事の出来ない事件だ。
仮にもし相手の言った通りの事になってしまえば一生後悔してしまうほどの、大切な選択をしなくてはならない事を彼は悟った。例え話の様に現状を話した射道具の発言を聞き終えると、フィルスターは静かに瞳を閉じた後、目を見開きこう答えた。
「んなもん、法則性がねえ時点で回答は決まってらぁあ！

全部だ！！」

「えっ？」
【全部だと？】
「主のそばに居る事、主が話してくれるまで待つ事。主が仮に落ち込んだとして依頼に行けない時、俺がどんな口実で上司に現状を悟らせず、主の評価を下げない様に行動する！　食事も、風呂も……何ならベットタイムだって、俺はそばに居てなんだってしてやらぁあ！」
「……」
彼の出した答え、それは主人のために自分が後手に回るというシンプルな回答だった。悩みがある事は彼も解っているものの、自分が知っている以上に主人が苦難の道を歩いて来たという推測は立っていた。そんな主人のために何か出来ないかと考える日々はゼロでは無いが、彼から何かを話してほしかったとしても、自分からその内容を聞こうとすれば主人を傷つけてしまう。互いに互いの事を気遣いながら傷つくくらいならば、自分が幾ら言いたい気持ちを抑えても良いほどに、主人から離してくれるその日が来るのを、ずっとずっと待っていると言うのだった。
身体がいくら負傷しようとも、主人の為ならば身体を張ってでも行動を取る事を止めるつもりは無い様だ。
「フィル。それは一歩間違うと『変態』になりますよ。」

「んなこたぁあ主が元気になるんだったら、やっすい対価だっつーの！　へーんだっ！　変態に成るんだったら、一生主に変態扱いされたらぁあ！　主からの皮肉なら、褒め言葉だっつーの！」
とはいえ周りから聞けば、今のフィルスターの発言は主人へ対する『思い』をぶちまけた一瞬だ。性別その他の関係性を掛け合わせれば『変態』の領域に侵入しかねないとリニログーンは言うも、彼は開き直ったかのように自信が変態であろうと構わないと言い放った。現に彼にはその行為を裏付ける証拠があるためか、別に何と言われようとも気にはしていない様だ。
大好きな主人に変態と言われようとも、彼からしたら褒め言葉の様にも聞こえる様だ。
【やけになっては話にならんだろう。】
「それこそが答えだって事ー　俺は主が大、大、大好きだ！　どーんな姿の主になろうとも、俺は主のパートナーである事を決めたんだ。俺は主の将来も、見守りながら護って見せるぜ。それこそが俺の生きがいだ！」
【……】
その後彼はやけになった気持ちを抑えながら返答を続け、主人を見捨てないと再度言い放った。それを聞いたシノワビートはしばらく沈黙し、何かを決めた様子で射道具の瞳を動かし、彼のそばへと近づいた。
【……なるほど、やはりお前等はただのパートナーマシナリーではないか。質問するだけ野暮だとは思ったが、確固たる思念があるなら平気だろう。】
「ぇっ、思念って？」
【独り言だ。よかろう、お前等に居場所を特定する施しをしてやる。ＧＨ５０１フィルスターこの部屋にはもう一体、同じシャドゥーグがあるだろう。それを持ってこい。】
「ぇっ、フィル。同じモノがココにあるんですか？」
「あぁ、あるぜー」
適度に近づいた彼は返答に満足した様子で独り言を言うと、フィルスターにある物を持ってこいと指示した。それは以前主人宛てに届いた荷物の事であり、今彼の目の前を飛んでいる射道具と同じもので、今は倉庫に眠っていた代物だった。まさか同じものがあるとは思わなかった様子でウィンドベルは質問すると、フィルスターは軽く返事を返しながら倉庫を開け、中から同じ射道具を取り出した。
電源を入れ再び飛び立たせると、シノワビートの意志が入った射道具の元へと近づいて行った。
「シノワビートが俺等に暴動をするよう仕向けた頃、ＧＲＭ社から虹箱が送られてきてな。半分俺と主は忘れてたが、故障したコイツの修理をした後に思い出したんだ。俺はコイツに、後の事を任せたって事も、な。これで良いか、シノワビート。」
【あぁ。そこのビジフォンの上に置け。データを飛ばしてやる。】
「へーい。」
その後部屋に来た経緯を軽く説明しながら確認を取ると、相手からの指示を受けた。指示を受けたフィルスターは再び飛び立たせた射道具に戻るよう手招きをし、両手で支えながらビジフォンの上へと置いた。

すると彼の行動を見た射道具は瞳の色を変え電子音を響かせると、ビジフォンは何かを感知したのか画面を立ち上げ、その中にデータを落とし射道具の中へと転送し出した。
ある種の外部操作を行っている事をフィルスターは知ると、行われている回路の情報を拾いながら内容を確認し、送られたデータが良い物なのかを人知れずチェックしていた。
【データ送信完了。後はコイツが、自動的に主人の反応をキャッチすればそばに向かう事をするだろう。　そこまでの行動は、お前等がやるがいい。】
「ぁ、あぁ……　ありがとう、シノワビート。」
【礼を言うのは、事が終わってからにするんだな。相手は一筋縄ではいかない死の亡霊、抜かる事無く対処に及べ。】
「おうっ！」
その後データを送信し終えたシノワビートからの声を聞き、彼は返事をし頭を下げた。彼の様子を見たアリン達も同様に頭を下げ、とても心強い手助けを得た事に感謝していた。
そんな彼等の行動を見たシノワビートは去り際に一言告げると、回路への割り込みを止め静かに射道具の身体をベットの上へと戻して行った。降り立ったベットの上で射道具は瞳を閉じると、電源が切られたのか翼の発光を止め、止まってしまった。
「っしゃあ！　出かけるぞ、野郎ども！！」
「おーっ！」
何事もなく現状が済んだのを見て、フィルスターは主人の代わりに指揮を取り、射道具を飛び立たせマイシップへと向かって行った。助けるべき、主人の元へと向かうために……

自分を取り囲む周りの空間、それは。いつも時間によってもたらされる事が多かった。周りの景色は日に日に姿を変え、人々の生活に刺激を与えるべく変わって行く。前まで小さかった存在が大きくなっている様に、景色もまた少しの変化を得ていた。だが……
『俺はずっと、俺が俺でいられる場所を探していた。』
その変化のある世界の中で、俺は何かを失ったかのように感じる事もゼロでは無い。自分自身が立派な存在だと思えない事も１つの理由だが、俺は場を提供された中でしか活動する事が出来ない。仮にもし一人で行動する事が許されたとしても、俺自身の行動では何も生みだす事は出来ないと思っていた。
俺の見つけた生き方を否定された、あの時から……　自分にとって一番の『空間』を、逃していたのかもしれない。
『親父に否定され、家族と共に居る事を捨てた俺は、俺の叶えたい夢のために行動していた。
巡り行き着いた先であるリトルウィングでも、それは変わらないつもりだった。……でも。』
【捨てた場を再度作り直したい気持ちが捨てきれず、ましてや夢と現実による不一致に怯え、全てが全て思い通りになったわけでは無かった。】
俺は結局、過去と未来に不足を感じる事が嫌いだっただけなんだ。家族と共に行動したとしても、見つけた夢の叶わない未来何て欲しくない。夢を求め行き着いた成果があっても、それを認めてくれる相手が居なければ意味が無い。
過去から存在する俺の居場所を捨てた結果、俺は『繋がり』を失い独りになった。友人と言える相手とも出会えたのに、俺は夢を叶えきれず、ましてや友人さえも助ける事が出来なかった。そしてまた一人になった俺に残された先に、俺は何を求めれば良いのか解らない。
『俺は俺自身がやりたい事を封印して、何時しか依頼に励むようになった。叶えたい目標が、何時しか自分から仲間に変わって行った。家族と思える存在を、護りたかったから。』
【だがそれは、お前が捨ててきたはずの過去に従う生き方でしかない。自分が自分で居る事を捨てた運命だ。】
護りたいモノが出来たからこそ、俺は自分の本領が一番発揮できるスタイルに変更した。種族でも不一致がある事を知っていたフォースを捨て、経験を積み慣れてきた接近戦を好むブレイバーに。持っていた道具も長杖から剛拳に代わり、何時しか銃をも握る生き方に変わって行った。
俺を俺として認め、そして一緒に居てくれると言った仲間のために、俺は全力を出したつもりだ。それで俺は、満足していたつもりだ。
【お前の力は、そんなものだけのために使うには惜しいだろ。お前の力は、もっと大きな存在を消し去る事すら出来るだろ。】
『俺の力は……』
【お前が持つ力を存分に発揮すれば、護る家族すら恐れる存在を根本から消し去れるぞ。もっともっと大きな力を、見せつけてやればいい。】
『でも、それは……　フィル達が、望む事なのか解らない……　俺が良くても、周りが良くな

ければ』
【後から付いてくる『結果オーライ』という言葉を、知らないのか？】
でも俺の周りに居る存在も、外敵に恐れを抱く存在もゼロでは無い。ゆえに俺が、出来る事を行い周りを護るだけの力が大きく貢献できるのなら、それは周りを広げる行動に繋がるのではないのか。だがそれを行えば、さらに夢から離れ俺である事を捨てる行動。

解らない。解らないんだ。

俺にとって最良の選択肢は、何処にあるんだ？　教えて欲しい。でも、誰が教えてくれるんだ？　仲間と言っているのは俺であって、周りから見た俺は何に値するんだ？
誰に聞いて良いのかさえも解らない、この質問は何処に向けたらいいんだ。その中に浮かぶ、光輝く翼を俺は見た気がする。
『……　フィル……』
俺の事を待ってくれる存在が、何処かに……　居た気がするんだ。でも、誰だったんだろう。家族と離れた俺を、待ってくれる奴……なんて……　……

【眠るがいい。存在が解らない恐怖そのものから、逃れるために。】

惑星パルムに存在する、海底レリクスの中。静かに流れる水のせせらぎが聞こえるその場に立つ、一人の存在。自身の動きを阻まないズボンに、着慣れた上着を羽織っただけのビーストの青年。綺麗に整えたオールバックの金髪は印象的で、髪色を際立たせる日焼けの肌。髪に映える海の様な青い瞳の青年は、ただそこに立っていた。
だが彼の居る場から少し離れた部屋には、幾多も倒れる自立起動兵機達の姿。そのそばには幾多の闇の粒子が存在し、つい先ほどまでその場に【ＳＥＥＤ(シード)】が居た痕跡も残っていた。戦うために行動をしたかのようなその光景は、とても彼の事を良く知る存在達からしたら不思議がる光景だろう。
その場に立っている青年は、本当に彼なのかどうか。悩ましく思うかもしれない、残酷な光景だった。

「……！　居た！　主！！」
「ギラムさん！」
【ん、もう来たのか。】
そんな彼の居る空間に、何かを探しているのか駆けてくる存在達。先頭を走っていた緑色のボディが印象的な機械竜は、立っていた青年の姿を見つけ声を発した。やって来たのはギラムのパー

トナーマシナリーである、フィルスターだった。
「お前等、どうやって此処が解った。」
「俺等の秘蔵手段を使ったまでだ。主、帰るぞー」
「リトルウィングの方々も心配なさっていて、ギラムさんにお聞きしたい事があるそうなんです。最近の、通り魔の件で……」
その場に揃ったメンバーは次々に青年の姿を見つけ、帰宅するべき場所へ帰ろうと言い出した。行方不明になっていた『ギラム』を探していた彼等からすれば、今の安心感はとてつもない物だろう。だがそんな彼等の話を聞くも、青年はその場を動かず首を左右に曲げ退屈そうな仕草を見せていた。
「通り魔？　何の話だ。」
「主は知りませんか、紅い鎌を持った通り魔のを話を。」
青年からの問いかけを耳にしたリニログーンは、説明するべく相手の特徴を述べた。すると青年は一瞬不気味な笑みを浮かべた後、すぐさま表情を戻し右手を前へと出しながらこう言った。
「紅い鎌とは、これの事か。」

シャキンッ！

「なっ……！！　ま、まさか主……！！」
「あぁ、確かに俺がやった事だ。この世界に蔓延る、ＳＥＥＤを倒すためにな。」
「ＳＥＥＤって……　じゃあ通り魔っていうのはどういう事なんですか？」
青年の手の中に現れたモノ、それは彼等の言う『紅い鎌』を表す大剣『ソウルイーター』　不意に持ち出された武器を眼にした存在達は動揺する中、彼は軽く持ち直すかのように鎌を振り下ろし、手の中に収めるかのようにしっかりと刀身を握った。その持ち姿はあたかも『彼のために存在する武器』の様な姿であり、とても数日前まで手にしていない武器とは思えない光景だ。
ＳＥＥＤを狩るために行動していた、今の彼にとって相応しい姿だった。
「汚染された生物、そして邪魔な輩を始末したまでだ。……ま、ちゃんとは止めを刺していない事の方が多かったがな。クックックッ……」
『？　主、あんな笑い方をしたか……？』
そんな異様な素振りを見せる青年を見て、フィルスターは一瞬違和感を感じる光景を目にした。彼の目の前に立っているのはまさしく彼等の探し求めていた『ギラム・ギクワ』ではあるものの、フィルスターには何処か知っているはずの主人とは違うと思ったのだ。武器を持つ姿がさまに成っている事も踏まえ、彼の笑い方に違いを感じた様に思えたのだろう。そんな時だ。

パタパタパタ……

「ぁっ」
「ん、何だこれは。」

《……》
「ディーラカーナ……さん？」
彼等の元に、遅れてやって来た射道具の姿が目に映った。持ち主として登録した存在の事を追いかけてきた様子で、後から推測を立てたフィルスター達に後れを取り、今になって到着したのだ。発声機能を持たない射道具は主人の事を見つけ近くを漂うも、何らかの異常を見つけた様子で機械的なメッセージを流し出した。
《個体識別情報一致。何らかのジャミングを観測。》
「ジャミング？」
不意に発せられた声を聞きとった存在達は驚く中、フィルスターは確信した様子で前へと歩いた。彼の行動を見かねたウィンドベルは止めようと手を伸ばすも、何故か声が出ず彼の行動を見守る体制に入った。
「……　主。」
「ん、何だ。」
「俺の名前を言ってみろ、主。」
射道具の姿に気を取られていた仲間達は、不意にやってきた会話を耳にし、前を見た。するとそこには主人と相棒が対峙するという謎の光景が広がっており、とても主人に溺愛しているフィルスターとは思えない行動だった。彼の手には相変わらず長銃が握られており、場合によっては何かするのか気迫が漂っていた。
「フィル、いきなり何を」
「いいから、ちっと黙っててくれ。」
「何言ってんだ、いきなり。」
「良いから答えろ！　ジャミングなんて、マシナリーが早々に観測できるはずねえからな。お前が主なら、俺の名前くらい呼べるはずだ。答えろ！」
彼を制止しようとするリニログーンの言葉を遮り、フィルスターは青年に向かって叫んだ。自分にとって大好きだった主人がそこに居るはずなのに『居ない』と感じる苛立ちもあるのか、彼は懸命に叫び名前を呼んで欲しいと心の中で吠えていた。フィルスターの行動を見た仲間達は立ち尽くす中、青年は静かに口を閉じ、動きを見せた。
「……クックックッ、やはりバレていたか。優秀だな、この宿主の相棒は。」
「貴様ッ……！！　主に何をしやがった！！」
再び青年を知る存在達からしたら違和感を覚える笑い方を青年はし、何かを理解するかのようにフィルスターを見下ろし出した。瞳の色が変わった事を知ったフィルスターは銃を構え、主人の中に居るであろう敵存在に対し叫んだ。
「何、コイツの身体を借りているだけだ。この惑星には『ビースト』という血肉に相応しい個体が居るとは、想ってもみなかったがな。血の滾る力と熱意は、喰らうに相応しいか。」
「まさか、シノワンが言ってたアレって‥…・！」
「ギラムさんが握ってる、あの鎌のせいですね。ベルちゃん！」
「任せて下さい、アリンさん！！」

青年の話した内容を聞き異変に気が付くと、アリンはすぐさま異常元を観測しウィンドベルに指示を出した。命令を受けた彼はすぐさま手元に長杖を召喚しながら相手の元に近づき、テクニックを演唱し放った。
しかし、
「燃え盛れ炎よ！！」
「！　馬鹿よせッ！！」

ゴォオオッ！！

「クックックッ、中々だが効かんな。『俺』には。」
放たれた炎の波に飲まれそうになる中青年は鎌を振り、熱風もろとも超常現象を全て消し去った。しかし鎌を握る手や衣服には焦げ跡が残っており、青年の言う『本体』には当たっていない事を告げられた。
「相手は主の身体だぞ！　精神的に潜り込んでる相手に、テクニックなんか放ったら思うつぼだ！！」
「だったら、あの鎌を落とせば良いだけだよー！」
制止しようとしたフィルスターにテクニックが効かない事を告げられたその時、彼等の横から勢いよく飛び出すメイド服の姿が目に映った。宙を靡くフリル付メイド服を着たメアンはすぐさま射程距離内に青年を納めると、手元に大剣を召喚し鎌に向かって振り下ろした。
「ギラムゥ、覚悟！」
「それは甘すぎる行動だな。」

ガキンッ！！

「……あっ！！　ぬっ、抜けないっ！！」
「マスター！　相手はフィルのマスターだ、力じゃ敵わないぞ！」
「そんなーっ！」
彼女の攻撃は開いていた左手によって止められてしまい、刀身を握られた手から抜けないのか、メアンは両手で必死に剣を取ろうとしていた。そんな彼女の行動を見た青年は剣を飛ばす様に刀身を押し返すと、彼女はそのまま地面に倒れ、すぐさま体制を立て直し後方へと距離を取った。
「ハッハッハッ！！　さぁ、こぬならこちらから行くぞ！！！」

「！　ギラムさんッ！」
「主！！」
その場に揃う面々の攻撃が通用しない事を証明し終えると、青年は鎌を握り皆に向かって襲い掛かった。

「くっそっ！　卑怯な真似しやがって……！！」
捜索願いを極秘に行っていたフィルスター達の居る、惑星パルムのレリクス内。本来ならば相手を見つけ無事に保護すれば依頼が完了するも、今の彼等にはそんな生易しい依頼の終わり方が求められていない。むしろ通常の任務よりも、最も過酷で最も考えなければならない相手と対峙していた。
彼等のパーティを纏めていたリーダーを、精神で操っている相手から解放しなければならなかったのだった。
「フィル、とてもじゃないですが太刀打ちできません！！」
「んなこたぁあ解ってんだよ！！　だからって、主を殺すなんて俺には出来ねえ！！」
ほぼ一方的な攻防戦が繰り広げられる中、ウィンドベルは地面を転がりながらもフィルスターに向かって叫んだ。本来ならば敵に回るはずのない相手を相手にし、なおかつ無事に助け出すにはどうしたら良いのか。作戦すらも立てる世暇を与えない敵に、彼等はなす術もなく武器で防ぐのが精一杯だった。
力では到底かなわず、遠距離から攻めようにも何処を狙って撃ち放てばいいのかすらわからない。完全に劣勢状態だった。
「力では到底ギラムさんには敵わない事は解っていましたが、戦闘狂に等しいこの状態じゃ……」
「ギラム強すぎー！　アタシ達が纏まってもビクともしないなんて。」
「クックックッ……　どうしたどうした？　もう終わりか？」
息が上がり衣服に汚れが付きだすアリン達に対し、敵は息も切らさず手にしていた鎌を器用に回しながら挑発した。元々外仕事を得意としていたギラムの素質が十分に生かされ、かつ普段とは違った戦闘方法が面子にとっても痛手な行動だ。
見慣れた戦い方であれば弱点となる隙があるはずなのに対し、現状はそれとは違った攻め方をしてくる。完全に新規の戦闘を、今の彼は行っていた。
「……んなわけ。あるかってーの……！」
「フィル！」
そんな敵の挑発を聞いたフィルスターは懸命に立ち上がると、手にしていた拡散銃を長銃へと持ち替え、果敢にも正面から特攻を仕掛けた。彼の行動を見かねたウィンドベルは慌てて止めようとするも、すでに走り出した彼は敵の懐付近に辿り着き、攻撃を開始しようとしていた。
「俺の……俺の……！！　主を……返しやがれぇえええ！！！」

ガキンッ！

攻撃範囲内に入った事を確認すると、フィルスターは持っていた銃を逆手にし、刀身による強打を行った。

しかしフィルスターの攻撃を見かねた敵は鎌でその攻撃を受け止め、二人は睨み会うように視線を交えた。
「小賢しい、銃如きで敵(かな)うと思うてか！！」
「誰が……戦うなんて言った！！」

ガシッ！！

「なっ！　離せこのっ！！」
「いくら馬鹿力の主でも、則った元凶と剥がしちまえば無力だろうが！！　お前なんかに、俺の主を奪われてたまるか！！！」
「フィルちゃん！」
「フィルルー！」
攻撃が入らない事を予測しての行動だったのか、フィルスターは銃を捨てる様に体制を変え、敵の腕に身体ごと乗りかかった。力では到底敵わないと解っていた彼はそのまま両手を動かし、敵の持つ鎌を手から引き離そうとした。
その最中も自身の身体を引きはがそうとする力がやってくるのを感じ、彼は両足を腕に絡め翼の発光を強め、エネルギーをフルで使っていた。
「俺はぜってえ諦めない……！　主がどんな状況でも、絶対に諦めなかった姿に俺は惚れてんだ！！　何も知らないで身体だけ使うテメェなんかに、主を渡さない！！」
「黙れ！　下等生物が！！」

バシンッ！！

「ぐぁあっ！！」
「フィル！！」
しかしそんな彼の行動はすぐさま開いていた左手によって引き剥がされ、そのまま地面に叩きつける勢いで投げ飛ばされた。機械のボディが地面に崩れるかのような音が周囲に響き渡り、フィルスターは痛みに耐えながらも顔を上げ、敵を見た。飛ばされた彼を見かねたウィンドベルとリニログーンは、慌てて彼の元へと移動し手元に短杖を召喚し治癒を開始した。
「フィル、しっかり！！」
「……クッ、やっぱ主に身体を振り下ろされるとなると……効くぜ……　パーツが幾つか凹んだな、コレ。」
「無茶はよすんだフィル！　あの状況の主は、主じゃないんだぞ！？」
「んなこと……言ってられっかっ！　あの身体がある限り、あの勇ましい身体の中には主が居るんだ……！　俺が助けてやらないで、誰が主を助けるんだ！！」
「フィル……」
治療されながらも幾つかパーツがへこんだのか、フィルスターは辛そうな表情を見せながらも立

ち上がろうとしていた。そんな彼の行動を見たリニログーンは彼に説教をするも、彼からしたらどんなに自信がボロボロになっても、助けたいという一心なのだと叫んだ。
今の彼を助けられるのは自分達以外にはおらず、ましてやこの場で野放しにしてしまえばますます主人の名声が無くなってしまう。不可抗力に等しい存在の手によって、主人の未来が無くなってしまう事が、フィルスターには耐え切れないのだ。
「クックックッ……　ぬかせ下等生物が、その戯言を吐く頭諸共。落としてくれるわ！！」
「フィル！」
「主ぃいいーーーー！！！」
三体のパートナーマシナリーのやり取りを聞いていた敵は不気味な笑みを浮かべた後、持っていた鎌を構え彼等の頭部を砕こうと振り下ろす態勢に入った。相手の動きを見かねたリニログーンは慌てて両手に鍵爪を出し防御する体制に入り、ウィンドベルは自分の身体で護ろうと彼の顔にしがみ付いた。自分を含め一撃で周りがやられてしまうと確信し、彼が叫んだ。
その時だ。

ギシッ……

「……　……？」
「ッ、何だ？　身体が……動かん……！！」
瞬時に振り下ろされ意識が壊されると確信した三体であったが、やってくるはずの攻撃が来ないと思い、眼を開け前を見た。するとそこには鎌を振り下ろす態勢で止まった敵がおり、身体の制御が効かないのか両手を動かそうと身体を動かしていた。そんな彼を見たフィルスターは何が起こっているのか解らないまま、再度主人の事を呼んだ。

ギシッ……！

「クッ、何だ……！　何で動かない！　意識は全て抑え込んだはずだ！！」
すると再び敵の身体がこわばる様に動く事を止め、意識体が苦悩している様子が見えた。それを見たリニログーンは両目を閉じ一気に見開き、おぼろげな相手の意識を感じ取った。
『誰だ……俺を、呼ぶのは……』

「心が動いた……！　皆さん、主の事を呼んで下さい！　主がココを探してます！」
自身の行き過ぎた能力が功を奏したのか、彼は周りに居るメンバーに名前を呼んで欲しいと叫んだ。それを聞いた皆は一瞬慌てるも体制を変え、武器を持ったままそれぞれが声を発した。
「ギラムさん！　戻ってきてください！」
「ギラムー！　アタシ達はココだよ！！」
「クソッ、止めろ！！　呼ぶな！！」
声を聞き再び身体が動かない現状に動揺した敵は、耳を抑えながらも抗う意識を丸め込もうとし

ていた。チャンスと見込んだフィルスターは痛む身体をよそに、再び武器を剥がそうと飛びかかった。
「させっかあぁああ！！」

ガシッ！！

「ぬっ！　くそっ！！」
「主！！　しっかりしろっ！！　主はそんなに、弱くないはずだ！！　俺は全部知ってる、主がどれだけ強いかなんて解りきってる事だ！！」
「私達にとって、ギラムさんは居なくては駄目なんです！！　ギラムさん！！」
「ギラムー！　戻ってきてッ！！　フィルルが心配してるんだよー！」
「ギラムさん！！」
「ミスター！！」
「主！！」
言う事を効かない身体から鎌を取ろうと、フィルスターは懸命に固められた指を剥がしながら叫んだ。出会ってから今に至るまで数々の主人を見て感じた事、好意は無くとも自身が少しずつ魅かれて行くほどのイキザマを見せていた事。ましてや現状に負けてしまう様な主人ではない事を彼は叫ぶと、周りに居た皆は走りだし敵を取り囲むように叫んだ。誰もが『還ってきて欲しい』と、強く願った。
その時だ。

「……　……フィル。」
「主！　……ちぇいさぁあああ！！」
腕を掴んでいたフィルスターの元に、聞きなれた声色で自分を呼ぶ声が掠めた。呟きに等しかった微かな声を感じ取った瞬間、フィルスターは右手を上げ手刀を作り、鎌に向かって振り下ろした。

バシンッ！！

《クッ！　術が敗れただと……！！》

「っ……」
「主！！」
「ギラムさん！」
「っしゃあぁ！　主直伝の手刀、なめんなごらぁああ！！」
固く握られていた鎌は地面へと叩き落され、鎌から念話の様な声が聞こえてきた。それと同時に操られていたギラムの身体は膝から折れ、その場に崩れる様に倒れた。

操られていた主人の身体を取り返す事に成功し、フィルスターはガッツポーズを取り鎌に向かって高らかに想いが違うと言い放った。皆が彼の身体を気遣う中の外れた行動ではあるが、彼からのとても手痛い主人愛の一撃だった。
「主、しっかりしてください！　主！！」
「……ッ、フィ……ル……」
《無駄だ、もうそいつの身体はボロボロだ。たっぷり頂くモノは頂いた、時期にそいつは死ぬ！！　治癒をしても手遅れだ！》
「テメェ……！！」
傍へと駆け寄ったリニログーンは肩に手を置き主人を呼ぶも、正気が薄い様子で擦れた声で唸った。すでに体力が限界に近づいている事を告げられると、フィルスターは毛を立たせる勢いで浮遊する鎌を睨みつけた。
まるですでに用が済んだかのような物言いに、納得の行く結末ではない事が彼の気分をさらに悪くさせるのだろう。このままでは、彼の気が収まるまで銃撃戦が始まってしまいそうな、そんな気配を漂わせていた。その時だ。
「そんな事……させません……！」

サッ！

「希望の名の元に……暖かな光と癒しの力を！！」
彼等のそばに駆け寄っていたアリンは呟きながら立ち上がり、天に向けて右手を上げ何かを呼ぶように言葉を唱えた。キャストであれば皆使用する事のある『ＳＵＶ(サブ)ウェポン』を呼び出す態勢に入ると、皆彼女の行動を見ようと視線を移した。
すると次の瞬間、彼女の周りに異空間を繋げる変動が生じだし、上空から畳まれた翼のような機械が下りてきた。フィルスター達とは違い白鳥の様な可憐な翼をしっかり背負うと、彼女は羽ばたくかの如く両手を広げ、翼を一気に展開しだした。それと同時に翼から周囲の存在達に向けた白色の光が飛び交いだし、皆の傷を癒し出したのだ。先ほどまで劣勢だった皆の体力を回復させる、温かい光だった。
「っ……　……みん……な……？」
「主！！」
飛び交う光の粒子が飛び交いしばらくすると、先ほどまで苦しそうに唸っていたギラムがゆっくりと眼を覚ました。それを見たフィルスターは驚きながらも主人の元へと駆け寄り、リニログーンの隣に割り込みながら顔を近づけ、相手の視界に入る様に顔を見た。おぼろげな視界が徐々にハッキリしだすと、彼の目の前には相棒の顔が映ったのか、少しだけ嬉しそうな顔を見せていた。
《何っ、低下したはずの心拍数が戻ろうとするだと……！！　刈り取ってくれ》

「強制ご退場！」

ドッゴスッ！

《ごわっ！　何しやがる！！》
「お呼びじゃないご主人様は退場なんだから！　今のギラムに、絶対手出しさせなーい！」
「自分もだテメェ、タダで帰れると思うな！！」
「ヘイユー！　仕置きタイムだ！！」
そんな様子を見かねた鎌は始末をつけようと動き出したその時、浮遊する自身を蹴り飛ばす感覚に襲われ、地面を転がった。不意にやってきた攻撃に反抗するも、何時しか取り囲むメアン達に睨まれ、彼女の言う仕置きが開始された。メアンとラスベリー、そしてリニログーンによる合体攻撃が彼を襲った。

「……あったかい……　……フィル、アリン……」
「ギラムさん、もう大丈夫ですよ。私が絶対に、助けてみせます。貴方に助けていただいた時から、ずっとお礼をしたかったんですから。」
そんな事が近くもあり遠くで行われているのを知らないギラムは、自身が包まれている空間によって助けられた事を知った。翼を開いたまま光を発するアリンに手を握られ、誰の力によって助けられたのかを理解した。そして自分が今まで何をしてしまったのかも、同時に悟るのだった。
「良かった、主の心がまだあるって解って……　主……ッ！」

グッ！

「ウッ！　……痛ぇってフィル……」
「グスッ、我慢しろ主っ……」
傷だらけではあるが無事一命を取り留めた事を知ると、フィルスターは泣きながら主人の身体に抱き着いた。しかし痛む身体は完全に治癒していない様子でギラムは苦しそうに唸るも、フィルスターは少し力を考慮しながらもすがる行為を止めようとはしなかった。その後顔を上げ意識を遮断していた元凶の心配はしなくて良いと言うと、彼は何かを思い出したかのように身体を起き上がらせようとするも、全身に痛みが走った。
「主動くなって！　傷だらけなんだぞ！？」
「私が支えます。フィルちゃん、左腕をお願いできますか？」
「お、おうっ」
慌てたフィルスターは起き上がろうとする主人を止めようとするも、そばに居たアリンは機械を送り返しギラムの右腕を自身の肩に置いた。華奢な身体で支えられるのか不安ではあったものの、その様子を見せない彼女に彼は身体を預け、開いていた左腕を相棒の肩に預けた。
両腕をしっかりと支えられた事を確認すると、彼はゆっくりと足を曲げ、その場に立ち上がった

。
「……ありがとな、二人共。」
身体が完全に立ち上がると、彼は二人に礼を言いながら前を見た。
するとそこには、小さな攻防戦を終え相手をお縄にしたメイドの姿があった。何処から取り出したのか解らない荷造り用の紐で、鎌は強固に縛られ刃先が使えない状態となっていた。
「ギラムー！　怪しい輩をひっ捕らえましたーっ！」
《……負けた。メイド如きに……》
「自分達にかかればこんなもんです！」
意気揚々と成果を知らせるメイドともう一人の相棒を見て、ギラムは苦笑いしつつも２人に礼を言い、相手の近くへと少しずつ歩き出した。軽く動揺するフィルスターではあったものの隣を支えるアリンからの眼を見て、仕方なく主人の行きたい場所へと向かう補助をするのだった。
「……ソウルイーター、お前。……もう、良いのか。未練は。」
「えっ？」
ゆっくりと近づきある程度の位置まで移動すると、彼は不意に妙な事を良い出した。言葉を聞いた一同は驚き鎌を見るも、相手の表情は見れず襲ってくる気配が無い事しか解らない状態だった。

自分達が知らない空白の時間で、何があったのか。

そんな疑問が、今の彼等を包みだしていた。
《……　……お人よしだな、そんな戯言で不確かな事柄を信じているとは。》
「主、どういう事だよ。主は意識を奪われてたんだろ？」
「あぁ、気付いた時には確かにそうだった。……でも、意識が閉じ込められてた時に知っちまってな。アイツ、元はキャストだったんだ。」
「マジかよ！？」
しばらくして彼の問いかけに対し、鎌は静かに答え武器の発光が弱まった。何があったのか知るべくフィルスターは主人に問いかけると、武器の意識は元々『男性キャスト』のモノだった事を彼等は知った。
グラール太陽系の中に存在する、彼等の知らない場所で生活していた人であった。腕前は確かであるが正確に難があると言われる事の多かった彼は、ある存在と行動を共にする事も少なくなかったそうだ。
「ＳＥＥＤの免疫がまだ無かった当時に、意識を徐々に蝕まれていたらしくてな。今でもキャストで、ＳＥＥＤの影響を受けて狂化する事例があるだろ？　あれの対策が無かった時に、な。」
《……》
「ＳＥＥＤは消すべき存在であって、俺達にとっても倒すべき相手だ。……それだけ不幸な人達が居たって事を、改めて知った感じだな。だから、意識が閉じ込められてた時にフィルの声が聞こえて、嬉しかった。」

「主……」
今でもキャストの身体を守るために行われている『検疫』が無かった時代、侵食性の強いＳＥＥＤの攻撃を免疫で返す事が彼等には難しかった。人々であればフォトンを駆使し根本から絶つ事が出来たモノの、造られた存在である彼等はフォトンの扱いが難しいとされる点も多々見つかっていた。ゆえに今の様な時代に生きていれば心配する事の少なかった事が、彼の身に起き身体を失ってしまった。その意識の強さは何時しか彼の手にする武器の中へと入り込み、自己で動く様になってしまったのだ。
「俺はずっと、お前のために戦う事は出来ない。身体もこんなんだし、俺の事は諦めてくれないか……？」
《……》
「まぁでも、未練がある時点で中々良い持ち主候補になった俺をみすみす見逃すわけ……ないか。」
「ギラム、どうしちゃったの？？　あんなのに加担することないよー？」
そんな経緯を知ったためなのか、彼は意識を失っていた時の礼はせず、自身の事を諦めて欲しいと告げた。彼の言う『使い勝手のいい身体』である事は今の自分の体調を見ればわかる事であり、どれだけ派手に戦ってきたのかもなんとなく想定が付いていた。簡単な任務では左程疲れる事のない彼がボロボロになり死にかける程、ＳＥＥＤを倒してきたのだと。
しかし周りの存在からすれば彼の言う事には疑問を抱く所もあり、メアンの言う通りもう一度身体を貸す事など無いと言い出した。
「まぁ、確かにそうかもしれないけどさ。……俺も、親父をＳＥＥＤに殺されたから……なんとなく、解るんだ。ＳＥＥＤが憎いって。」
「……」
自分でも解るほど妙な事を言ったと思ったのか、彼は静かに理由を話し彼の気持ちが解らなくもないと言い出した。彼の家族は同じ場には住んでおらず、連絡そのものもちゃんと交わす事が少ないほどに遠い場所で生活をしている。自身が小さい頃養ってくれていた両親の元を離れ今に至るまでの間に、彼は父親がＳＥＥＤの手によってこの世を去った事を知らされた。大切な自分の家族が失われた憎しみを思えば、彼の絶望感は創造たるものだろうと解っていた。
ゆえに、そのような言葉を口にしたのだ。
「主らしいな。でも、俺も主の身体をもう一度使おうものなら遠慮なく対抗するぜ。俺の大事な主なんだからな。」
「僕達も同じです。ギラムさんには、手出しさせません！　アリンさん達も！」
そんな彼からの言葉を聞くと、フィルスターは納得した様子で彼の発言に同意し、再度身体を取る事だけは望んでいない事を告げた。彼の発した言葉にウィンドベルも賛同しだし、彼の身体を気遣う仲間達からも諦めて欲しいと言った。
その時だった。

【本当にお人よしだな、ジュライエターナル。】

「えっ？」
彼等の居た空間に別の声が響き渡り、彼等は声の下方角を見た。するとそこには惑星間で行動をしていない筈の『シノワビート』の姿があり、彼等は相手の姿に見覚えがあった。それは数か月前の、ある事件で世話になった相手だ。
「シノワン！　どうしてここに！？」
やってきたのは彼等にギラムの居場所を特定する手段を与えたシノワビートであり、パートナーマシナリー達による復讐を目論んだ相手だった。軽く驚くメアンに対し彼は静かに歩きだし、経緯を説明し出した。
【探知するソフトを送ったのは我だからな。座標を追えば、何処に居るかは解る。……確かにそいつは、過去の遺産に等しい亡霊。だが持ち主が居ないとなれば、また同じ犠牲を出すだろうな。】
「シノワビート……」
【ボロボロで情けない姿だな。今なら一撃で仕留められそうなくらいに。】
「んなことさせねーかんなっ」
【する気も起きん。……お前、意識の無い我と共に来るか。】
「えっ？」
《何……？》
その後ボロボロな姿のギラムを見た後後方へと振り返ると、彼は鎌に対し唐突に協力をしないかと言い出した。意外過ぎる申し出に驚く皆ではあったものの、告げられた相手も驚く内容だった。
【我も憎むべき相手が居て、ＳＥＥＤもその内の一つだ。ただのマシナリーゆえ、ＳＥＥＤへ対する免疫は皆無だ。お前の様な力があれば、その心配はなくなるだろう。】
《……》
【その上、元がキャストなら話が早い。お前にも聞きたい話が幾つかあるし、腕っぷしならばワイルドビーストに並ぶくらいはあるつもりだ。変えてみないか、お前。】
《変えるだと？》
【お前にとって憎むべき存在が、俺にとっても絶つべき存在だ。共闘するには十分な条件に、新たな見方を我は提供する事が出来る。ワイルドビーストにはあのような連中が付いている以上、お前がそばに居る事は不可能だからな。】
彼もまた抹消するべき存在の中にＳＥＥＤがおり、彼にとってＳＥＥＤへの対抗手段がない事から近づかない相手でもあった。しかし彼の様に意識体そのものが協力しその術を授けてくれるのであれば、自身の身体を提供しなくもないと言うものだ。とても危ない取引に感じるが、彼等にとってみたら都合の良い条件が揃っているとシノワビートは言った。
「シノワンー　危ないよー？」
【ぬかせ、元より意識が有るようでない存在だ。仮に意識が捕られようと、価値を見出し我の行動を取れる相手ならば後悔など無い。そのために生まれたようなものだからな。】
「うー　アタシはシノワンの方が好きだけどなー」

【フッ　馬鹿なメイドだ、ただのマシナリーにそんな言葉を言うとはな。……まぁ、聞いても気分は悪くは無いがな。】
そんな彼に対しメアンは心配そうに声をかけるも、彼は意識の無いキャスト以下の存在である事を理解しており、一人の存在として行動出来ない事を解っていた。何かの目的のために造られた自身が嫌であったがために復讐を計画し、それを阻害され新たな道が開けた今、彼にとっての価値がある場所に付きたいと思っていたのだ。しかし捨て身の覚悟を見せるものの、メアンの言う事は彼にとっても励みになる言葉の様だった。
しばしの沈黙が流れた後、シノワビートは静かに手を上げ協力してほしい意志を見せた。
【来いよ、ソウルイーター　……いや、キリック。】
《……　ギラム、世話になったな。お前のおかげで、幾多のＳＥＥＤを刈り取れた。感謝する。》
「そっか。役に立って、良かったぜ。」
その後差し出された手を見たのか、鎌は返事をし周りを囲む存在達に一言告げた。自身の目的が少しではあるが果された事を告げると、彼は静かに差し出された手の内に収まる様に刀身を動かした。それを見たシノワビートはメアンから紐を受け取り、取り外す様に一つ一つ解いた後、軽く素振りをし手に収まった事を確認しその場を去って行った。

「……本当に、主はお人よしだよなー　通り魔って言われて、何人か襲ってたらしいんだぞー？」
元凶が予想外の存在によって回収されたのを見送ると、フィルスターは肩を貸した主人に向けて今回の事を報告した。事件の真相がどうだったのかは彼等の中にある秘密ではあったものの、これから本部へと戻り報告をしなければならない。
ゆえに、彼にもその話を簡単に説明しなければ、後が面倒なのだ。
「そうだったのか……？　……でも、悪いな。俺、何も覚えてないんだ。……不甲斐ないぜ。」
「んな事言うなって。俺の自慢の主なんだから、もっともっとかっこよく居てもらわないとな。……でも。」
「？」
彼の心配を聞いたギラムは申し訳なさそうに言うも、彼は首を横に振り、ギラムの顔を見ようと前へと出た。自然と預けていた腕は彼の肩か離れるも、ギラムはしっかりと立てる様子でアリンの身体からも離れ、二人はフィルスターを見た。
「本当に、主にもう一度会えてよかった。俺、主の事好きだからさ……　やっぱり今度から、俺も依頼についてくからな。辛い事も悲しい事も、俺にはちゃんと言ってくれよ？」
「あぁ、約束するぜフィル。……ありがとさん、迎えに来てくれて。」
「ぉ、おうっ！」
再度再開できたことを喜びながら、フィルスターは笑顔で生きていて良かったと言った。そんな相棒の言葉を聞いたギラムは彼に笑顔を見せ、その場に来てくれた皆に礼を言うのだった。

心の中に芽生えた、闇を抱いたまま……

ーＥＰＩＳＯＤ　ＥＮＤー